帝國實業讀本

卷二

375.9
Ha7
資料室

42532
教科書文庫
4
810
44-1933
200030
2100

資料室

3759
Ha7

文部省檢定濟
昭和八年八月二日　實業學校國語科用

帝國實業讀本

文學博士　芳賀矢一　編
文學博士　上田萬年
文學士　長谷川福平　訂補

東京　合資會社　冨山房發兌

伊勢神宮　筆呼龍谷蔦

廣島大學圖書之印

廣島大學教
39118
圖書

帝國實業讀本　卷二

目次

一　童心……北原白秋……一
　　空中習字（自修文）……相馬御風……八
二　多年一日の修養……村上專精……一二
三　十月の朝（詩）……宮崎丈二……一九
四　新井白石……二
五　天龍川下り……和辻哲郎……二六
六　小さい旅人……薄田泣菫……三五
七　雁（詩）……千家元麿……四四
八　平泉より……吉田絃二郎……四六

九　ダンファームリン……小西重直…四九
一〇　ロンドン市民の父……大山廣光…五六
一一　勞苦と快樂その一……小酒井不木…六三
一二　勞苦と快樂その二……小酒井不木…六七
一三　エヂソン（自修文）……中原岩三郎…七四
一三　怒を愼め……帆足理一郎…八一
一四　大石良雄その一……山路愛山…八五
一五　大石良雄その二……山路愛山…九一
一六　多摩御陵に詣でて……九八
一七　新年……一〇五
一八　たのしみは（短歌）……橘曙覽…一〇九
一九　神と地獄極樂……一一一
一　神……村井知至…一一一
二　地獄極樂……塚原澁柿園…一一五
二〇　フレデリック大王と酒井備後守……幣原坦…一一七
黑田如水（自修文）……八波則吉…一二三
二一　歌話……中村秋香…一二五
一　とりゐ坂……一二五
二　あがたの宿……一二七
三　燒野の原……一二八
二三　鉢の雜草……相馬御風…一二九
二三　春は來ぬ（詩）……島崎藤村…一三七
二四　士魂商才……澁澤榮一…一四〇
二五　紳士の國、子供の國……鶴見祐輔…一四四
我が國の家庭（自修文）……一五一
二六　五十鈴の流……河野省三…一五六

二七　日本の至寶……徳富蘇峯…一六五

帝國大學圖書之印

帝國實業讀本　卷二

一　童心

北原白秋[一]

聖心は童の心である。

越後の良寛禪師は、殊にこの童心の持主であつた。かういふ話がある。

一に童男、童女、二に手毬、三にお彈き。これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛樣がどんなに子供が好きで、子供たちと遊ぶ事が、またどんなに嬉しかつたかゞ思はれる。

その良寛樣も、子供たちには隨分ばかにされて、盛んにな

(一)詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣に生れた。邪宗門、洗心雜話、季節の窓、全集の外に白秋全集、等の民謠、童謠集の著もある。

ぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一所懸命に遊んでゐた良寛樣が有難い。

或時、例の通り、子供たちと隱れんぼをしてをられた。鬼になつた良寛樣が目を瞑つて「もういゝよ。」と言ふかはいゝ聲を一心に待受けてをられる。と、丁度、日の暮時で、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちら〳〵點きだすと、子供たちは急に遊を止めて、一人殘らず、こそ〳〵と歸つてしまつた。其所は子供だから、良寛樣も何もうつちやらかしである。無論いくら待つても「もういゝよ。」と言ふ者はない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうしてとう〳〵夜が明けてしまつた。良寛樣はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑

つて、やはり同じ所に、同じ姿をしたまゝ「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてをられた。その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

それからまた或時の事である。良寛樣が今度は隱れる事になつた。其所で見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻叢の中にもぐりこんで、それはかはいらしい事だ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠の樣に、頭からすつぽりと稾を被つて、おど〳〵してをられた。すると子供たちは、また例の通り、一人殘らずこそ〳〵と歸つてしまつたのである。それを良寛樣は少しも御存じない。また日が暮れて夜が來て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝の

やには

(一)西郡久吾編。北越偉人沙門良寛全傳。大正三、東京、目黒書店發行。

日が昇り始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻束をやにはにはづすと、おやつと驚いた。良寛樣が小さくなつて、もぐつてをられる。「おや、良寛樣が。」と言ふと、あわてて、「そつとしろ、そつとしろ。子供が見つける。」

その心のあどけなさ、有難さ、まるで子供である。

また或日の事である。その良寛樣が、男の兒や女の兒たちとお彈きをしてをられた。沙門良寛全傳に、(一)「禪師頗る大勝を博して、賭物のいり豆を多く得。」と書いてあるから、餘程ののり氣であつたらしい。丁度その時誰かゞはいつて來た。そして「おや〳〵良寛樣、なか〳〵あなた樣はお彈きが御上手で。」と褒めると、罪がない事、良寛樣はぽうつと面を赤くなさる。

良寛と子供等

河内舟人館

まるで少女の様に、さも〳〵恥づかしさうに、そつとそのいり豆を膝の下におし隠したといふ。その心の初々しさ、そのきまりのわるさ、恥づかしさは、全く佛の前に子供らしくおとなしく、身を謙(へりくだ)る心である。尊い聖心はすべてこの童心を源にする。

もう一つお話する。

或時、赤々と實がうれて、鈴なりになつた柿の木の下で、小さい子供が一人泣いてゐた。良寛様が通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭を撫でてやると、あの柿が食べたいと言ふ。「よし〳〵、それではわしが取つてあげる。泣くのではないぞ。」と言ひながら、やつとこさと木の上にはひあがつた。枝につ

かまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全く旨さうな柿の實だ。一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの。良寛樣は夢中になつて、嚙るは〳〵、まるで猿蟹合戰の赤いお猿の樣に、むしや〳〵と食べてゐる。下にゐる子供こそあはれである。それを見て火の樣に泣叫ぶと、始めて良寛樣も氣がついた。さあしまつた。これはといふので、あわてて枝を搖つたといふ話。思うてもそのあわて方のをかしさ、罪のなさ、眞正直さ、その子供らしさ、全く涙がこぼれる程嬉しいではないか。

禪師の玉の樣なこの童心は、榮藏といつた童の昔からそのまゝである。それは何物にも替難い、二つとない尊い天稟

である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたと言ふ、或日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。其所でまた〳〵叩かれた。「親を睨む樣な奴はかれひになるぞ。」これを聞いた良寛樣の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ家内中大心配で、あちらこちらと搜し索めると、或濱邊の岩の上に悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。「榮坊どうした。」と言ふと、榮坊いはく、「おらまだかれひにならねえか。」

かれひになると言はれたので、本當にかれひになると思つて、一心に海を視つめて顫へてゐた童心の正直さ。これをこそ生一本と言ふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。

——洗心雜話——

自修文

空中習字

相馬御風[一]

良寛和尚の書のいかにすぐれたものであるかに就いては、今更くだ〳〵しく述べるまでもなく、廣く知渡つてゐる。この良寛和尚の習字法に就いて、極めて面白い逸話が越後の人々の間に語り傳へられてゐる。それはかうである、

或時俳人の坡丈[二]といふ者が、良寛和尚の草庵を訪れて、こんな事をたづねた、

「良寛様、私はどうも字が拙くて困りきつて居りますが、何とかして字の巧くなる工夫はないものでせうか。」

すると良寛和尚は言下に問返した、

「お前さんは字を巧く書きたいと思ひなさるのかね。」

(一)詩人、評論家。名は昌治。明治十六年新潟縣に生れた。良寛坊物語、貞心と千代と蓮月、郷土に語る等の著がある。

(二)傳不詳。

言下に先方の言葉が終るや否や。

料簡了簡とも書く。かんがへ。こころ。

坡丈は答へた、

「無論ですそれだからこそ、かうして御教を願ひに參つたのです。」

和尚は笑つた、

「それだからいけない。自分がろくな字も書けないくせに、どうかして他人に巧いと思はれる樣な字が書きたいなどといふ料簡を持つてゐる、それがいけないのだ。それだから拙い字が出來るのだ。そんな考は一切捨ててしまひなされ。巧い字や、美しい字や、上手な字を書かうなどといふ考は一切捨ててしまひなされ。さうしたら少しは字らしい字が書けようといふものだ。」

「成程。」と坡丈は思はず膝を打つた。

そしてそれから坡丈は樂に字が書ける樣になり、隨つて字に

趣が出て來る樣になつたといふ事である。

良寛和尚は更にこんな事を或人に語つたとも傳へられてゐる、

「手習をするなら、空中にするのが最もよい。毎朝早く起きて、顏を洗ひ、神佛の禮拜を濟ませた後で、家の外へ出て、大空を仰いで立つ。そして、右の手を出來るだけしつかりと空に向つて伸す。その手で空中に字を書く。さうすれば、どんな大きな字でも自由に書ける。自分の名でもよい。一の字でもよい。天地玄黃でもよい。どんな字でも書く。毎朝書く。大空の涯から涯までの字を書く。どんな大きな字でも書ける。どんなにでも自由に書ける。これが卽ち空中習字といふ妙法ぢや。この空中習字の妙法を毎朝續けてやれば、必ずいゝ字が書ける樣になる。いゝ字が書けないまでも、心がそのお蔭をかうむる。わしはそれを何年

天地玄黃　習字の手本によく用ひる千字文の初の語で、天は黑く（玄）、地は黃いろい意。

となく毎朝やつてをるのぢや。」

成程、これは妙法である。私もその話を聞いてから、時々その空中習字をやつてみる。何とも言ひ樣のない爽快さを覺える。わけて淸らかに澄渡つた秋の朝の大空に向つてそれをやる時などは、全くたまらない爽かさを覺える。かうしてせめて一日に一度だけでもその樣な寬やかな、爽かな、のび〳〵した朗かな氣持になる事を續けて行く事は、私たちに取つては確かに貴い心の養である。

二　多年一日の修養

村上專精[一]

佛敎徒間に「天然の彌勒[二]なく、自然の釋迦[三]なし。」といふ諺がある。その意味は、彌勒も釋迦も自然にあれ程の地位になつ

(一)佛敎學者、文學博士。兵庫縣の人。昭和四年歿、年七十九。

(二)彌勒菩薩。未來に出現するといふ佛。

(三)釋迦牟尼の略。釋迦は西紀前四六六年印度伽毘羅國の王家に生れ、思ひ滯なく二十九歲の時家を出で、六年苦行した結果解脫の境に入り、八十歲で入滅した。

菩薩佛陀

告白

たのではない。多年一日の如く修行を怠らなかつた結果として、一は菩薩となり、一は佛陀となつたのであるといふのである。また支那の大聖孔子は、生れながらにして道を知つてゐたものの様に考へられ易いが、論語の中で孔子は自らその經歷を語つて、

吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えず。

と言つた。卽ち自分は十五歳の時から七十歳の時に至るまで、一日も怠る事なく修養を續けて來たといふのが、孔子の告白である。これに依つて見ても、釋迦や孔子の樣な大聖人

通弊

才子

(一)江戸時代の學者。名は襄、通稱久太郎。安藝の人。天保(一四九)年、三年(一)歿、年五十三。

ですらも、多年一日の樣に修養を繼續した結果、始めてあの樣な萬人の光と仰がれる偉い人物となつた事が分る。ましてや我々凡人は、一層修養を續けて行く事を心がけないでは、到底勝れた人物となる事が出來ない所以を、自覺しなければならない。

山陽の幼時（水野年方筆）

しかし、世人一般の通弊として、他人に何か勝れた所のあるのを見ると、とかく輕卒にこれを評して、彼は才子であるとか、或は彼は幸運兒であるとか言ひたがるのである。例へば、(一)賴山陽と言へば、誰もあ

の人は才子であつたと考へ易く、彼の成功は勤勉に依るものであるとの考を抱く者は誠に少い。しかし、傳記に依つてこれを見ると、前者の誤謬である事が明らかなのである。

賴山陽は德川時代の儒者賴春水の子である。彼は生れて僅かに八九歳の頃、既に幾多の軍記物を讀んで晝夜怠る事なく、時に寢食を忘れる事もあつた。遇眼病に罹つたので、父春水はその讀書を禁じたけれども、尙隱れてこれを讀む事を止めなかつたといふ。子供の時の山陽は既にこの樣な勤勉家であつた。また傳に「山陽平生讀書に耽り、著述に勤む。」とあつて、彼は終生著述に勤めた人である。卽ち彼の壯年の時の傑作は日本外史(二)であり、また晩年の大作には日本政記(三)が

(一)名は惟完、通稱彌太郎。安藝の人。(文化十三年(二四)七月十六日)歿、年七十一。

(二)二十二卷。漢の司馬遷の史記の世家の體に倣つて、源平二氏より德川氏に至る武家の歷史を漢文で書いたもの。

(三)十六卷。神武天皇より後陽成天皇に至る百八世、二千年間の編年史。

病革る

刪補する

ある。日本政記は病中に成つた。彼はその病が革るに遇ひ、「我が死まさに逼れり。」と言ひながら尙眼鏡をかけ、手に日本政記を取り、刪補して止まなかつた。或日俄に左右を顧、「我まさに假寢せん。」と言つて筆をおき、眼鏡をかけたまゝで終に瞑したといふ。彼の少年時代の事を思ひ、また晩年の傳を見れば、山陽の生涯は勤勉をもつて一貫されてゐたと言つてよいのである。

但し彼は性來酒を嗜んだ。毎日夕刻になれば必ず門下生と共に對飲したさうである。けれどもその分量に制限があつて、制限以上には一杯も過す事はなかつた。そして酒氣のある間は門下生と共に談論し、醒めれば卽ち書を讀み、五更

達人

に至らなければ眠らなかつた。朝はまた必ず早起し、しかも自ら衾を收めて、人を使はず、室内の掃除もまた自らこれを爲し、寒暑一定して變る事がなかつたといふ。これに依つて、彼は常に人に語つて、「山陽は才子なりと言ふ者は、未だ我を知る者に非ず。山陽はよく勤めたる者なりと言ふ者こそ、眞に我を知る者なれ。」と言つたさうである。

彼を思ひ此を考へるに、山陽は唯才子であつたと思ふのは誤謬に外ならぬ。彼は多年一日の樣な修養に依つて、自己の天才を喚び起した人である。獨り山陽のみならず、何人でも一つの長所を有し、達人であるとか、また上手であるとか評せられる程の人は、必ず多年一日の樣に修養して、自己の

天才を喚び起した人に違ない。

しかも修養は、一旦その天才を喚び起す事に努め、後はこれを廢してよいといふわけのものではない。その人の終生を期して廢する事のないのが、眞の修養である。若し中途でその修養を廢したならば、その樣な人は、その日から學問なり技能なりの退歩する人であると見てよい。飜つて老後に至つても、尙その道に於て退歩しない人があるならば、その人は常にその道の爲の修養を繼續してゐる人と見てよい。

みればたゞ何の苦もなき水鳥の
足にひまなきわがおもひかな

といふ歌がある。これは水戸黃門徳川光圀卿の作と聞いて

(一)水戸藩第二代の主。夙に修志を致し、海内の學者を招き、祕書を史を編纂し、大日本史を元祿十三年に完成した。(二)元祿三年に水戸黃門公と言ふ。

ゐるが、實にその通りである。江河の水面に鴨などの浮んでゐるのを一見すれば、木の葉などの浮いてゐるのと殆ど同様で、何の苦もなささうに見える。しかし、近寄つてよくこれを見れば、少しの暇もなく彼は我が足を使ひ、その足の力に依つて、浮んでゐるのである。人もまたその様に、外見だけでは何の苦もなく出來る事の様であつても、その人自身にあつては、常に暇なくその道の爲に盡す所があるに違ない。

停滯する

人間萬事休止すれば必ず退歩する。水は絶えず流れ動いてゐれば腐らぬが、停滯してゐると腐る。この規則の存する事を忘れぬ様にせねばならぬ。隨つて修養は生命のあらん限り廢すべきものではない。多年一日の様に繼續すべきものである。そしてさうするのが眞の修養である。

——通俗修養論——

三　十月の朝

宮崎丈二[一]

朝の日ざしが
家のまはりに
充ちてゐる、
まるで私の心を
たのしさで
いつぱいに充すやうに。
明るく心が澄んで
たのしい秋の朝だ。

(一)詩人、洋畫家。明治三十一年千葉縣に生れた。詩集爽かな空、太陽の娘等の著がある。

張りかへたばかりの障子も
新しくすが〳〵しい。

明るさをしたつて
群咲くコスモス(一)よ。
雁來紅も
庭を彩つてゐる。

時をり赤蜻蛉が
何匹も飛立つては、
また翅を休めてゐる、
草花の手に立てた竹の上に、

(一) cosmos.

草の葉の上に。

私はなんべんも
部屋から誘ひ出される。

だがやがて、
靜かに机に向へば、
あゝたのしさは
一層心に充ちて來るやうだ、
秋らしく心が澄んで來る。

四　新井白石

「男子は常に忍耐といふ事を習はなければならぬ。これを

(一)名は君美。江戸の人。享保十年(一三八五年)歿、年六十九。

(二)甲府綱重の子。五代綱吉子なくて養はれて六代將軍となつた。正德二年(一三七二年)歿、年五十一。

庭訓服膺する

習ふには、何事でも自分が堪難いと思ふ事から習ひ始めれば、久しい間には何でもなくなるものである。」と、幼少の白石(一)は、父から諭されたといふ。

新井白石は我が國近世の大儒で、學者としては多くの有益な書を著し、政治家としては將軍(二)德川家宣を輔け、內治に外交に頗る功績のあつた人である。その著述の一つである折りたく柴の記は、白石の自敍傳とも言ふべきものであるが、彼が幼少の頃、慈父から受けた庭訓を、生涯常に服膺して、いかに自ら心身を鍛へるに努めたかは、その書に依つてほぼ窺ひ知る事が出來る。彼は寒夜手習に倦んでは、冷水を身に浴びて睡氣を覺し、日に千字の手習を缺かさなかつたと

刻苦勉勵

(一)二三六三年

いふ程に、學者としての修養に於ても、武士としての鍛練に於ても、刻苦勉勵して身を立てたのである。

(一)元祿十六年江戸に怖しい大地震があつた。この時の白石の落著き拂つた立派な態度の如きは、流石に日本武士の眞面目此所にありとして、萬世に範を垂れるに値するものである。

新井白石

時は十一月二十二日の夜半を過ぎた八つ時頃であつた、突如として遠雷の樣な地鳴が起り、やがて小舟が大波に搖られる樣な大地震となつた。地面は所によつて三寸乃至五寸といふ程の龜裂を生じ、砂を持

裝束

嗜

上げたり、水を吹出したりして、見るから物凄い光景を呈した。當時白石の主君家宣は、まだ綱豐と言つて、官は參議で甲斐を領してゐたから、世に甲府宰相と稱せられてゐた。

白石はこの地震で眠を覺すと、裝束を改め、藩邸心許なしとて、二三の從者を連れて出掛けたのであるが、途中で若し息でもきれる樣な場合にはと、再び今にも倒壞しさうに搖れてゐる屋内に引返して、藥器を探し出し、それを傍に置いて、更に衣服を改めにかゝつたが、さうかうしてゐるうちに、つい藥の事をうち忘れて、出掛けてしまつた。後になつて、白石はこの事を「恥づかしい事である。」と歎いた。當時の武士は嗜として、印籠と稱する藥器を携へてゐたのである。白石は

市井

さうした異常の變に際しても、その嗜を忘れた事を歎ずる程の心の明らかさを持つてゐた。更に白石は途すがら、市井の町人どもが家をあけて小路に集り、地震のうはさに氣を取られて、家の中には火を點したなりにしてゐるのを見て、「かういふ時には火を消して置くものだ。」と言ひつゝ、藩邸へ走つて行つた。

また彼は家を出る前に、地震の後には必ず火事が起るであらうと考へて、一旦は家財を土藏の中に入れ、土を以て壁の破れた箇所を塗らせたものの、尙頻りに續いて地震の止まないのを見て、或は崩れ落ちる事がないとも限らぬ、よし崩れないまでも、新舊の土の塗合せ目が自然と開いて、其所

から火がはいる事もあらうかと思ひ、邸内に坑を掘らせ、綱豐公から戴いた書籍や、彼自身が多年心掛けて抄錄した書類などを土藏から取出して、その坑の中に入れ、疊六七帖をその上に積並べ、土を厚く掛けて置いた。藩邸から歸つて來て見ると、果して火事になつて、家は既に燒失せてしまつたが、貴重な書籍などは幸にして安全であつた。

「火勢稍衰へた頃に家に歸ると、かの書類を埋めた坑に近い家が燒落ちて、火がまだ消えなかつたから、水を掛けて火を消し、燒けた柱などを取りのけて見ると、上に重ねた疊は燒失せ、下の疊に火がつきかけてゐた。誠に危い所であつた。然るに初め心配した土藏は倒れもせず、燒けもせ

徒勞に歸す

碩學

ず、無事であつたから、坑を掘つたり、書籍を埋めたりした事は、皆徒勞に歸したわけだと言つて笑つた。」

白石は自らその當時の事をこんな風に書いてゐるが、どちらにしても、書籍の燒失せなかつた事は、非常な仕合であつた。我々は彼の苦心の徒勞に歸した事を笑ふべきではなく、寧ろ周到なその用意に敬服すべきである。

かゝる大變の場合に、從容として逼らない態度を執るのは、誠に修養を積んだ人でなければ出來ない事であるが、家財道具などには聊かも重きを置かないで、專ら學術資料の保存に努めた事は、また一代の碩學としての白石の心境を知るに足るであらう。そして自家の事一切を夫人や從僕な

襟を正す

政教卓越

(一)哲學者、批評家、文學博士。京都帝國大學教授。明治二十二年兵庫縣に生れた。ニイチェ研究、偶像再興、古寺巡禮等の著がある。

どの手に委ねて、藩邸への伺候を忘れなかつた彼の行動は、當時にあつては、奉公の當然の途ではあつたらうが、その臣道の履行に忠實であつた點には、覺えず襟を正さゞるを得ない。

白石は學問を以て身を立て、政教兩道に卓越した才幹を發揮した。そしてその言行には、また以て少年立志の範とするに足るものが甚だ多いのである。

五　天龍川下り

和辻哲郎(一)

愈、舟に乘りこむと、舳先に立つてゐる船頭が、櫂でぱんぱんぱんと舷を敲く。その音が霧を貫いて、水の上を遠くまで

飛沫

響いて行く。出發といふ波立つた心持が、いかにもふさはしくこの響に表されてゐる。この出發は、天龍川下りの全體の中で、最も印象の深い物の一つであつた。

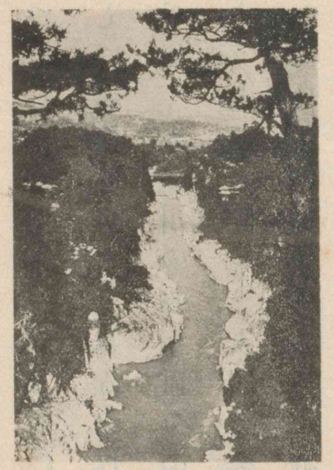
船頭は前に二人、後に二人ゐる。四人とも櫂を持つてゐる。瀨の所に來ても、二つの櫂で船を操縱する。一二箇所の瀨を下ると、すぐに天龍峽にはいつた。霧の中に兩岸に切立つた山が見える。下方は全部巨巖である。その間を船は一時間約七八海里の速力で下つて行く。河幅は狹いが水量が多いので、急流である割合に危險な氣持がしない。それよりも、寒さと、時々舷を越えて來る飛沫とが氣になる。兩岸の巨巖は實に澤山ある。「勿體ない。」「贅澤だ。」といふ言葉さへ使ひたいくら

ゐに。紅葉はもう色が褪せかゝつてゐるが、霧の間に隱見する所は誠に佳い。愈天龍峽にはいると、皆は「來てよかつた。」と言つたが、さういふ景色が、絶えず變化しながら何時までも續く。過去つて惜しいと思ふ隙もないくらゐに、後から〳〵現れて來る。

それが一時間も續いたであらう。受けた印象の量から推せば、可なり長かつた。人々はもう天龍川に親しみを感じて、曾て難船があつたといふ茶々淵に來ても、大して難所らしく思はなかつた。難所に來る毎に、先頭の船頭はぱん〳〵と舷を敲いて警戒する。そのぱん〳〵といふ勇ましい響を待つ樣な氣分にさへなつた。

落差

始めて山が開けて村が見えた。橋があつた。その橋の下流に櫓の瀧と呼ばれる天龍第一の難所がある。餘り長くもない瀨ではあるが、三丈三尺の落差があるといふ。舟は矢の樣に流れて行つた。舟底はがらがらと石にぶつつかる。飛沫は容赦なく飛びこんで來る。



天龍川上流

しかし、船頭は櫂で巧に舟を導いて行く。下の淵に突進んだ時には、舟の舳先はもう岩を避けてゐる。この難所を通つたのは、午前七時半頃であつた。

その後は追々山が開けて、村の見える事が多くなつた。霧

も晴れた。畑が見える。竹藪が見える。河原があるが、迫つた山の間を拔けて、穩な村の景色を見、やがてまた迫つた山の間へとはいつて行く心持は、自分に取つては、天龍峽よりも却つて好かつた。かういふ所にも人が住んでゐる。さうして激しい自然と戰つてゐる。それを眺めてゐると、長く〳〵流れて行く天龍川の心が、自分の胸にも通つて來る。その自然と、さうして人間――人間の姿は、此所にも見られるではないか。自分は河原の砂の上で遊んでゐる子供の姿を見て、涙ぐましい心持になつた。

天龍川としては、信濃の國境を越える前二時間程の間が、荒つぽく、大きく、天龍の名にふさはしいものであつた。

岸に立つ巨巖はもう見られない。しかし、激しい流が滔々と流れて行き、その上を、木の葉の樣な舟が水に揉まれながら、まつしぐらに落ちて行く感じは、前には見られないものであつた。このあたりは山の形も餘程違つてゐる。南畫にでもありさうな山が三つ重なつて、突如として目の前に現れたのも、このあたりであつた。

午後一時過、製紙會社の工場のある中部まで出ると、餘程氣分が違つて來る。此所からは山の形もすつかり變つた。地質が別になつてゐるらしい。この後も迫つた山の間を流れて行く事は同じであるが、しかし、暫らくの間は感じが小さくなる。

(二)静岡縣(遠江國)磐田郡。

荒涼

我々の氣分にも、大分倦怠の心持が加つたが、やがて二時間も經つと、西川(一)、戸倉(二)といふ樣な、妙に感じの深い村に出る。戸倉の河原では、船大工が巧妙な槌の調子を取つて、船を修繕してゐた。その邊からは谷も開けて、いかにも大河らしい氣分になつて行く。河原も大きい。その荒涼の感じが、丁度迫つて來た夕暮と相應じて、天龍川下りの最後の三時間は、また忘れ難い印象を我々に殘した。稍倦み疲れた氣持で、暮行く山と河とを眺めてゐ

天龍川下流

味氣ない

(一)詩人。名は淳介。明治十年岡山縣に生れた。暮笛集、春泣堇詩集等の著がある。

ると、その倦み疲れた氣持が、周圍の景色の中にいかされて來る。廣い河原の物寂しさは、丁度我々の心にふさはしい。薄暗くなつて行く水面の、何となく味氣ない氣持は、最早我々を乘せて流れて行くのに倦んだ樣に見える。船頭もまた倦んだ。しかし、それでいゝ。やがて月が現れた。それも薄曇の空である。

六　小さい旅人

薄田泣堇(一)

私たちが七つ八つの頃には、そろ〳〵秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日の樣に雁が渡つた。私たちはそれを見掛けると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎな

吹きさらし

(一)詩人。名は淳介。明治十年岡山縣に生れた。暮笛集、春泣堇詩集等の著がある。外、隨筆茶話、岬木地蟲、大魚蟲等の著がある。

がら、

雁よ棹になれ
棹になつたら鉤になれ

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲を涸して叫んだものだ。何時の間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡る事は、よく〳〵人氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

その頃はまた後の丘に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雑木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥と言ふと、私は海などを越えて來るあの小さい旅人の、あわたゞしい旅を考へて、何時も、言はう樣のない寂しい旅心地を覺える。

先づ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎて、そろ〳〵日影が黃色がゝつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると、暖い日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞く事がある。「あゝ、もう秋だな。」と、思はず振返つて見ると、矮小なくぬぎに雜つて、ずばぬけて背の高いにれの木に百舌が一羽止つて、黃色い夕陽を受けて、羽が金の樣にきらきらしてゐるのが見える。私たちはその瞬間、言はう樣のない强い、健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

百舌（鳥類寫生圖譜所載）

次にはひたきが來る。山家の午過、だるさうなきりぐすの聲も何時の間にか止んで、枯葉一つ寢返を打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底に、どこやらやつれた人の溜息とでも言つた樣な微な聲が漏れて來て、何の音とも分らない。すると樹蔭のにら畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顏を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉の樣に小鳥がついと身をそらして逃げて行つてしまふ。それがひたきだ。

ひたき

ひたきと言つたら、まるで悲哀を抱いてゐる人の樣に、大抵は連に離れて、唯一人で出て來る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招く樣に、ひよくり、ひよくりと輕い御辭儀をして、さゝやく樣な聲で唄ひ出す。私はそれを見ると、人の爲、世の中の爲と言つた樣なわけでなく、自分一人の爲に唄つて、それで滿足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

四十雀（鳥類寫生圖譜所載）

ひたきが來てものの十日と經たぬ間に、四十雀が來る。こ

もんどり打つ

ませた身振（鱒）

の鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群を組んで來る。山から里へ移るをりなどには、まるで時雨でもする樣に、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、眩しい程すばしこく、雀のたごなどを啄き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、透徹つた銀の鈴を振る樣な聲で、早口にしやべり續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色の產毛そのまゝの雛兒が雜つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返る事もあるが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家育の

きさく

（火燵、炬燵）

すばしこい、きさくな魂その物を見る樣な氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、みそさゞいが來る。これはひたきと同じ樣に、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶ樣にして來る。冬の初の午過、山近い田舍の小家で、爺さんはこたつに潛りこんで、こくり〳〵と居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐に吊した干菜の影が見すぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかし

みそさゝい（鳥類寫生圖譜所載）

て絲目が切れて、睡さうな錘の音がぱつたり止むと、こそこそと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聽取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかかる。さうかうする間に、鳥は舌打をする樣な聲を立てながら、ひよい、〳〵と小刻みに籬を傳はつて、隣から隣へと、狹苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行くのだ。それがみそさゞいである。

白　頰

みそさゞいと後先になつて頰白が來る。冷い雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頰白が灰色の胸までぐしよぬれ

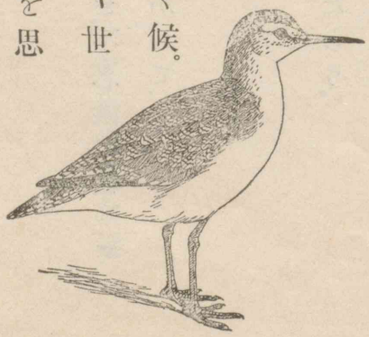
鶯鳴

になつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の鳴聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。
子供泣かすな火の用心。
今度の便に金十兩、
やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみ〴〵世渡のむづかしさと旅心の寂しさとを思はずにはゐられない。

後の雜木林にこんな小鳥が來る頃になると、野にはもうそろ〳〵うづらが來、しぎが來る。



し　ぎ

(一)詩人。明治二十一年東京市に生れた。炎天、千家元麿詩集、芽ぐめる枝等の著がある。

七　雁

千家元麿(一)

暖い靜かな夕方の空を、
百羽ばかりの雁が
一列になつて飛んで行く。
天も地も動かない靜かな景色の中を、不思議に默つて、
同じ様に一つ〳〵せつせと羽を動かして、
黑い列をつくつて、
靜かに音も立てずに横切つて行く。
側へ行つたら翅の音が騷がしいのだらう。
息切がして疲れてゐるのもあるだらう。
だが、地上にはそれは聞えない。
彼等はみんな默つて、

心でいたはり合ひ、助け合つて飛んで行く。
前の者が後になり、
後の者が前になり、
心が心を助けて、せつせ〳〵と
勇ましく飛んで行く。
その中には親子もあらう。
兄弟姉妹も友人もあるに違ない。
この空氣もやはらいで靜かな風のない夕方の空を選
んで、
一團になつて飛んで行く
暖い一團の心よ。
天も地も動かない靜けさの中を、
汝ばかりが動いて行く。

(一)小説家。明治十九年佐賀縣に生れた。島の秋、草の秋、露の紀行、白雲飛ぶ、吉田絃二郎全集等の小説、外多數の感想集がある。

(二)芭蕉の忌日、十月十二日。芭蕉は江戸時代の俳人。姓は松尾。伊賀の人。(一六四四―一七九四)元祿三年歿、年五十一。

默つてすてきな早さで、
見てゐるうちに通り過ぎてしまふ。

(三)福島縣(岩代國)伊達郡大木戸村字大木戸。

(四)同縣安達郡大平村。此所に昔鬼の棲んだといふ岩屋がある。

(五)元祿二年芭蕉が奥羽地方から北越地方を旅行した時の紀行文。

(六)元祿二年。

八　平泉より

——現代詩人全集——

吉田絃二郎(一)

偶然にも昨日は芭蕉忌(二)に當つてゐた。北に進むにつれて山の雪は深く、かゞやいて行つた。

那須野の荒寥たる、伊達(三)も黒塚(四)のあたりも、唯曇りがちな月明りの下に杳然(えうぜん)として連なつてゐた。

奥の細道(五)に據れば、芭蕉が日光に詣拜したのは四月朔日(六)になつてゐる。それから行を起して白河(七)を越え、黒塚の岩屋を見、飯塚(八)の里に佐藤庄司(九)が舊館を訪うたのは早苗取る頃

(七)白河の關。福島縣磐城國(西白河郡古關村大字旗宿にあつた。

(八)同縣信夫郡飯坂町。溫泉で名高い。

(九)信夫庄司佐藤元治。櫻信忠信の父。

落寞
冬枯

(一)宮城縣の中部を東流する川。長さ五十キロメートル。歌枕として名高い。

(二)芭蕉は五月五日仙臺に入り、この人の所に一泊した。しれ者

であつた。

私はカバンの中から奥の細道を出して讀みながら、月の下の黑い山や、地の涯の明滅する町の燭を拾うてゐた。全く東北の旅は落寞たる感じを呼起す。走れども〳〵冬枯の野ばかりである。

名取川(一)は月の下に白く流れてゐた。

奥の細道で畫工加右衞門(二)といふ男を「風流のしれ者」と芭蕉は言つてゐるが、今でも仙臺にはそんな人が住んでゐる樣な氣がする。寒い夜の風に吹かれながら歩いてゐると、仙臺の町は田舍の京都と言つた感じがする。地方に行つて、落著いた、のび〳〵した町を歩くのはいゝものである。

(一)岩手縣西磐井郡一關町。田村氏の舊城邑。古刹

(二)岩手縣西磐井郡平泉村。東北第一の古蹟。藤原氏居館當時はその繁華京都に擬せられたといふ。

(三)金色堂のこと。天治元年(一一二四)藤原清衡の建立。金ばくを以て張つてあつて光堂といふ。内外の裝飾華麗で、當時の工藝を萬粋を集めたもの。

(四)辨財天堂のこと。光堂の西北。國寶曼茶羅が陳列されてゐる。

(五)平泉の北を流れる川。下流に義家、貞任高名の衣川柵の址がある。

(六)奥羽、北上兩山脈間の廣い縱谷の水を集めて仙臺灣に注ぐ。長さ三六九キロメートル。蕭瑟

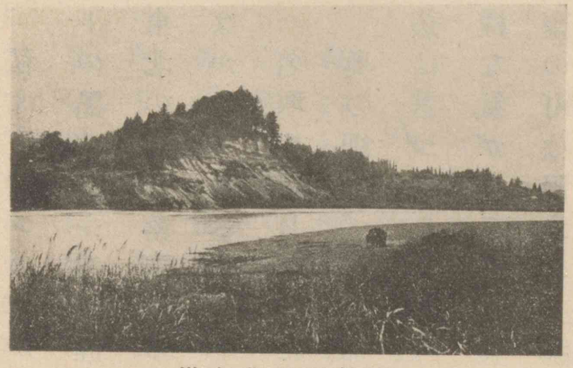
(一)名は忠衡。藤原秀衡の三男。

(二)中尊寺の西北山麓にある。

(三)哲學者、文學博士。京都帝國大學教授。明治九年山形縣に生れた。

(四)Edinburgh.

一(一)の關の北に城跡らしい丘がある。確かに城跡であらう。杉の木立に包まれた古刹がある。此所に來れば既に平泉(二)の面影を留めてゐる。



高館下の北上川

南すれば冬の田を隔てて平泉の山が寒げに迫つてゐる。

光堂(三)のあたり、唯二三株の紅葉、散りもせで火の如く燃えてゐるのを見た。

光堂を出て、辨天堂(四)の横から白山社の麓に立てば、崖の下に衣川(五)が横たはり、西してやがて北(六)

上川と結び附いてゐるのを見る。

滿目眞に蕭瑟(しつ)(せう)である。日本の涯かとも思はれる程のわびしさを見せて、唯低い山のみが雪雲の下に連なつてゐる。

芭蕉をして「義勇忠孝の士なり。」と歎稱せしめた泉三郎(一)の城跡は、左手に琵琶(二)の柵の痕を殘して、空山いたづらに冬の日に連なる形である。

日は傾いて來たぱら〳〵と落葉を打つて雪が降つて來た。

九　ダンファームリン

小西重直(三)

古典的な雅趣を感じさせるエヂンバラ(四)を出て、鐵路十五

六マイル北方に走ると、現代的の小文化都市ダンファームリンに著く。エヂンバラの古本屋で千八百十五年出版のダンファームリンの町及び教區に關する鄉土誌的の珍書を手に入れたが、それに據ると、この町及びその附近は昔から織物が盛んであつて、千八百十一年には、町及び教區全體の人口約一萬八千人のうち、織物を業とする者が八百餘人もあるといふ統計になつてゐる。現在では町だけでも二萬五千以上の人口を有し、依然として織物の有名な産地となつてゐる。

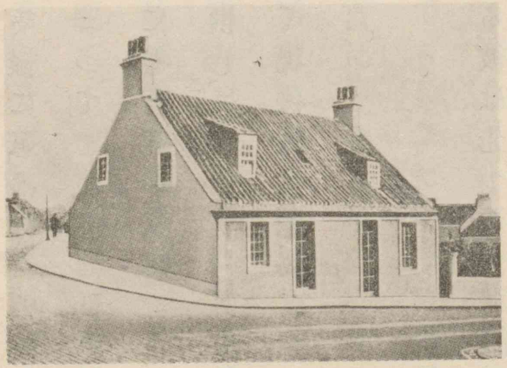
あのカーネギー(三)はこのダンファームリンに生れたのであ

(一) Dunfermline.

(二) 大正十年のこと。

(三) Andrew Carnegie. アメリカの實業家、製鋼王。(西紀一八三五—一九一九年)

る。その誕生の家も今に殘つてゐるが、間口三間に奥行二間といふ、田舍の物置小屋同樣の建物である。彼はその二階の薄暗い小さな部屋で生れたといふ事である。そしてその兩親が米國のピッツバルグ(一)に出稼に行くまで十三年間、この家に住んで居つたのである。世界の鋼鐵王として、また世界的慈善家としての彼の成功の生活と、この誕生の家とを併せ考へれば、うたゝ人間の勤勉と運命との力に驚かざるを得ない。しかし、成功後の彼から回顧すれば、この物



カーネギーの生れた家

(一) Pittsburg.

金殿玉樓

(一)Scotland.（蘇蘭）

古典的

置の樣な、馬小屋の樣な誕生の家は、金殿玉樓よりも懷かしかつたらうし、この田舍の小都市ダンファームリンは、いかに謙遜しても、世界的意味を持つてゐる樣に思はれたであらう。しかも彼は己の誕生と成功とによつて、この町に世界的意義を與へたばかりでなく、また實に七百五十萬圓といふ巨額の金をこの町の文化事業に提供し、(一)スコットランドの首都エヂンバラの古典的色彩に對して、現代的文化都市としての新裝をダンファームリンに與へたのである。

それは今から十九年前の事である。彼は先づ五分利附で五百萬圓をこの町に提供した。そしてこの財團の委員にあ

(一)charm.

てた書面の中に認めてあるこれが提供理由を見ると、「日々の仕事の辛勞で單調に生活してゐるダンファームリン市の住民に、一層の趣味と光明とを與へてもらひたい。一般市民、殊にその若い人々に對して、他の町では見出す事の出來ない樣なチャーム(一)と幸福と向上との生活を感じさせてもらひたい。若し我が故鄕ダンファームリン出身の人々が、たとひ將來世界の何所に放浪するとも、その故鄕を回顧すると共に、この町に生れた己の生活は實に幸福であつたと感ずる樣になれば結構である。財團の委員諸君の骨折でこれ等の事がらが實現されゝば、それは諸君の仕事の成功であり、然らざれば失敗であると言はねばならぬ。」といふのがその主意

であつた。

さて、五百萬圓の巨額の資金をもらひ受けたダンファームリン市では、その後カーネギーの精神を體し、熱心に事業を經營したから、カーネギーは非常に喜び、千九百十一年更に二百五十萬圓の追加寄附をしたので、今では七百五十萬圓の基金となり、人口僅かに二萬五六千の小都市で、毎年四十萬圓に近い金がその文化事業に使はれてゐるのである。しかもカーネギーは、「諸君は常に先驅者であり開拓者である事を記憶し、過誤や失策をなす事を恐れるには及ばない。過誤をなさない人は何事をも爲し得ぬ人である。」といふ言葉によつて、財團委員の自由な試みを奬勵してゐるのである。

開拓者

奬勵

そして彼は「己の故郷を、他人の金を期待する樣な乞食的依賴心に充ちた市とするには忍びない。市は市として、自分の努力によつてその文化事業を經營せねばならない。自分が寄附した金で經營した事業を、若し市の力で經營する事が出來る樣になれば、財團はこれから手を引いて、更に新しい事業を起す樣にしたいのが自分の本意である。」と明言してゐる。彼は自分の故郷にも、自分自身の生涯の樣な獨立自營的の名譽を與へようとしたのであらう。

凡そ意義ある歴史は過去のものではなくて、現代までも生きてゐるものである。スコットランドの首都エヂンバラが

創造

(一)佛文學者。明治三十一年大阪市に生れた。ミッセ詩集、イプセン戯曲全集等の譯著がある。

その歴史を誇るのは、過去を誇るのではなく、それが現代も生きてゐるのを誇り、無限の創造を爲す所の歴史を誇るのであらう。ダンファームリンはスコットランドの王室に關係のある古い寺の外に、格別重要な歴史を有してゐるわけではないが、今やカーネギーの人道的行爲によつて、意義のある歴史を作りつゝあるのである。そしてこの歴史は、必ずやまた無限の創造をなしつゝ、永遠に人生の文化に取つて價値のある内容を與へるものとなるであらう。

一〇　ロンドン市民の父

大山廣光(一)

英國の首府ロンドンは、霧の都と言はれるくらゐに、濃霧

(一)Thames. イングランド東南部の川。ロンドンを貫流して北海に注ぐ。長さ約三四〇キロメートル。

(二)tunnel. (隧道)

(三)Rotherhithe. テムズ河の南岸、塔橋の下流。

(四)Wapping. テムズ河の北岸。

を以て知られてゐる。それで此所の市民が霧に惱まされる事は一通りではない。中でもテムズ(一)河の渡船は、その濃霧の爲に衝突したり、顚覆したりして、度々慘劇を演じてゐた。それ故、テムズ河の河底トンネル(二)の開通は、ロンドン市民年來の願であつた。

濃霧のテムズ河

西暦一八〇二年にテムズ河の兩岸、ロザーハイス(三)とワッピング(四)との間に河底トンネルを掘る計畫が立てられた。しかし、その時は土龍の樣にこつ〳〵と土を掘つて行つたから、

その工事は少しも進まなかつた。その上に或暴風雨の夜、大崩壞が起つて、七箇年の苦心と、數百萬圓の資金とが、空しく泥水中に消えてしまつた。それ以來ロンドンの市民は、この工事を不可能の工事とさへ呼ぶ樣になつた。

(一)チャタム造船所の傍の古材木に、疲れた身體を休めた若いブルネルは、(二)じいつとテムズ河の流を眺めてゐた。うら寂しい秋の黃昏時である。ブルネルの義兄は、河底トンネル工事の犧牲者の一人であつた。あの暴風雨の夜、義兄が慘死した時、ブルネルは歎き悲しんでゐる姉に向つて、「兄さんの復讐はきつと私がして見せますよ。」と言つた。この時復讐と言つたのは、取りも直さず、テムズ河底トンネル工事の完成であ

(一)Chatham.

(二)Sir Marc Isambard Brunel. イヤリスの發明家、技師。フランスに生れた。印刷機、編物機械等を改良發明した外、橋梁や浮橋の設計をした。(西紀一七六九—一八四九年)

る。が、ブルネルは、土龍の樣にこつ〳〵掘つてゐるのでは、何時まで經つても工事が完成しない。それには、何よりも先にトンネル開鑿機を發明しなければならないと思つた。それ以來ブルネルは、晝は工場で職工として働き、夜は自分の家で開鑿機の發明に寢食を忘れてゐたのであつた。

或日の事、夕暮が迫るに隨つて、テムズ河には何時もの樣に霧がこめて來た。濃霧は見る〳〵うちに物象の姿を消してしまつた。と突然河上で大音響と共にもの凄い叫聲が起つた。渡船と貨物船とが衝突したのである。數名の乘客は水に流されたが、濃霧の爲にそれを救ふ事も出來ない。忽ちその人たちは水に呑まれてしまつた。

「呪の濃霧――」と、ブルネルは思はず叫んだ。それと共にまた彼は、今自分が腐心してゐる事業の貴重な事を、しみ〴〵と感じないではをられなかつた。「私はロンドン市民の幸福の爲に、是非河底トンネルを完成しなければならない。」と、彼は更に堅く決心した。が、これは考へれば考へる程、困難な事業である。何時の日に完成される事か、それは神でなくては豫言出來ない。しかし、ブルネルは義兄の死を思ひ出しては、弛む心に鞭を當てた。

をりもをり、この時ブルネルはぱら〳〵、ぱら〳〵といふ音を耳にした。「はて何の音だらう。」と、じつと耳を澄すと、その音は足もとから起つて來る樣である。よく檢べてみると、落

葉の上に細かい木の屑が落ちてゐる。彼は夕明りに透して、古材木を檢べた。すると一匹の蟲が木の孔から出て來た。

ブルネル

「これはいゝものがあつた。」この時ブルネルの頭には、突如として一つの考が閃いた。「こんな小さな蟲が材木に孔をあける。――それは私がテムズ河の底に穴をあけようとするのと同じではないか。」と。そこで彼はその船食蟲を拾つて、その動作や構造を詳細に研究し始めた。さうなると、彼にはもう晝もなければ夜もない。遂に彼は船食蟲の材木を食破る動作を基本として、一つの開鑿機を造つた。しかし、最初はどうも理想的な物が出來ず、組立てては崩し、

慘澹
朦朦
能率

崩しては組立て、慘澹たる苦心の結果、それから五年目に漸く實用的な物を造り上げた。

その五年間、彼は生活費を稼ぐ爲に晝は工場に通つたが、夜の過勞の結果、頭が朦朧として能率があがらず、その爲に工場を追はれた事も屢あつたが、一八一八年の三月、とうとう彼は蜂巣型トンネル開鑿機を完成した。だが、苦心の蜂巣型トンネル開鑿機の完成も、ブルネルに取つては、本來の事業の一部分に過ぎなかつた。それを應用してテムズ河底トンネル工事を完成するのに、彼は尙十八年間の苦心奮鬪を續けなければならなかつた。

一八四三年、ブルネルに依つてテムズ河底トンネルは始

めて開通した。それ以來渡船は廢止され、隨つて濃霧の時の慘害もまた全くなくなつた。そして彼は今日も尙「ロンドン市民の父」と仰がれてゐる。

——新編偉人物語——

一一　勞苦と快樂　その一

憂き事のなほこの上につもれかし
　かぎりある身の力ためさん

これは名高い古歌であるが、誰の作ともはつきりした事は分らない。しかし、この歌を口ずさめば、大抵の人間はぐづぐづしてゐられなくなるであらう。そして自分の過去を振返つて、恥づかしさに堪へぬ氣持がして來るであらう。そし

てまた憂き事、苦しき事に一種の樂しみと勵みとを見出す樣になるであらう。

凡そ仕事と名の附く以上は、どんな仕事でも必ず苦しみの伴なふものである。成功の祕訣は、この事實を覺悟して、仕事その物に眞の興味を見出し、勞苦その物に眞の愉快を覺えるのにある。昔から世に優れた人は、何れも仕事をする事に無限の喜を感じ、勞苦その物にこの上ない幸福を感じた人であつた。イギリスの大政治家(一)グラッドストーンは九十歳近くになつて、「私は勞苦に最大の幸福を發見した。私は若い時分に勤勉の習慣を附けたが、こ

グラッドストーン

(一) William Ewart Gladstone.（西紀一八〇九—一八九八年）

の勤勉の習慣を附けたといふその事が、勤勉に對する立派な報酬であつた。若い人は、多く休息といふ事をば、努力を中止するといふ意義に解釋する樣であるが、私は眞の休息とは、一つの努力から他の努力に移る事だと思ふ。」と言つてゐるが、誠に尊い教訓である。

偉大な人々は、決して餘生を安樂に送る爲に勉强する者ではない。彼等は勉强する事に快樂を感ずるので、隨つて死ぬまで最大の努力を續けようとする。かのアメリカの發明王(一)エヂソンは、「私は一つの發明を完成すれば、もうその發明に用がない。多くの人は、發明から來る收入を、努力に對する報酬の樣に考へるかも知れぬが、私自身は少くともさうは

報酬

餘生

(一) Thomas Alva Edison. アメリカの科學者、發明家。主な發明は蓄音機、活動寫眞、無線電話、炭素線白熱燈等で、實に一千種以上の特許をもつてゐた。（西紀一八四七—一九三一年）

思はぬ。私の最大の喜は、努力して仕事をする事である。」と言つたといふが、これで考へてみても、偉人の精神の据る所を知る事が出來るであらう。

偉人とか天才とか言はれる人には、生れつきよりも寧ろ勤勉によつて才能を發揮した者が多い。いかによい素質をもつてゐても、捨てて置いて光る道理がないわけである。有名な畫家ラファエル(一)をミケランジェロ(二)が批評して、「彼の偉大は、彼の天才よりも寧ろ彼の勤勉に負ふ所が多かつた。」と言つたのは至言である。ラファエルは僅かに三十七歳で亡くなつたが、それにも拘らず、實に二百八十七枚の繪と、五百以上の素描とを遺した。或人がラファエルに向つて、「どうしてこんな

(一) R ffaelo Santi. イタリーの畫家。(西紀一四八三—一五二〇年)

(二) Buonarroti Michelangelo. イタリーの彫刻家、畫家、建築家。(西紀一四七五—一五六四年)

至言

偉大な仕事が出來ましたか。」と尋ねたら、彼は優しい聲で、「私は小さい時分から何事をもよい加減にしなかつたのです。」と答へたといふ事である。フランスの有名な畫家ミレー(一)も、

ラファエル

「私はすべての少年に向つて、唯働けと忠告するだけである。皆が皆天才になる事は不可能であるかも知れぬが、皆が皆仕事をする事は可能である。どんな天才でも、仕事をしなければ何にもならぬ。」と言つてゐる。

(一) Jean Francois Millet. (西紀一八一四—一八七四年)

一二　勞苦と快樂　その二

一體、人といふものは、とかく他人の仕事を羨ましがるものである。それはどんな仕事でも、表面は樂な樣に見えるからで、隨つて他人のやつてゐる仕事にたづさはつてみると、始めてその苦しさが分つて、自分のもとの仕事がこひしくなつて來るものである。若しすべての人が仕事をする事その事に快樂を感ずるならば、仕事の種類は問題でなくなるであらう。だからアメリカの教育家のホレース・マン[一]といふ人も、「自分の現在の仕事を嫌つて、他の仕事に移る人の氣が知れない。私に取つては、仕事する事その事が、魚の水に於け

〔一〕Horace Mann.（西紀一七九六—一八五九年）

る樣な關係になつてゐる。」と言つてゐる。

どんな職業に從事してゐても、その職業は決して人間の品性を左右するものではない。それに從事する人の心の如何によつて、その職業が卑しくもなり、また尊くもなるのである。また職業の爲に手や足を汚染する事は、決してその心を汚染するのではなくして、寧ろ清淨ならしめるのであると言つてもよい。外見の穢い職業に孜々として働いてゐる人の姿を見れば、崇高な感じこそすれ、穢いといふ感じは毛頭もしないものである。だからソロモン[一]の箴言にも、「汝かの事務に勤勉なる人を見ずや。彼は國王の前に立つ事を得べし。」とあつて、いかに勤勉の尊いかを教へてゐるのである。

左右する

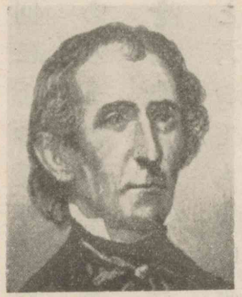
孜々として

毛頭

〔一〕Solomon. 昔西部アジヤ（今のシリヤ）の南西部にあつたイスラエル王國第三代の王。明君として名高く、その治世は全盛時代であつた（西紀前九三七年—西紀前

(一)John Tyler. 第十代の大統領。(西紀一七九〇—一八六二年)

アメリカ合衆國の大統領タイラー(一)が、任期が滿ちて退職すると間もなく、その政敵は彼を飜弄する積りで、彼をその居村の測量師に選んだ。タイラーは厭がるかと思ひの外、喜んでその職を引受け、しかも一所懸命にその仕事に從つた。



タイラー

これには流石の政敵等も降參して、「もういゝ加減に辭職してはいかゞですか。」と言ふと、タイラーは平然として、「私はどんな仕事でも引受けるが、一旦引受けた以上、決して辭職は致しません。」と返答したといふ事である。

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を

(一)大學にある句。

統計

種々の危險から遠ざからしめるものである。(一)「小人間居して不善を爲す。」と古言にも言つてゐるが、小人に限らず、すべて人間といふものは、ぼんやりしてゐる時に、決してろくな事を考へるものではない。犯罪學上の統計を見ても、倦怠が各種の犯罪の極めて重大な原因となつてゐるのである。オーウンフェタムは、「事務のうちに成長しない者は最も下劣な人間だ。」と言つてゐるが、私は寧ろ「仕事をしない者は最も危險な人間だ。」と言ひたいと思ふのである。

何事をするにも、人はとかく仕事を早くし遂げたいと希望するものである。いはゞ成功を急ぐのであるが、これも畢竟するに、勤勉勞苦その物に快樂を發見し得ない爲で、眞に

勤勉な人は、一面から言ふと、頗る氣の長いものである。ダーウィンはみゝずの研究に對して、實に前後三十年を費してゐる。文豪ゴールドスミスは、「一日に四行づつ書けば十分だ。」と言つて、名高い「荒村行」を書くのに前後七年を費した。しかも彼はその四行を書くのに一日かゝつて、うん〳〵言つて苦しんだといふ事である。

スミスドルーゴ

急がずばぬれざらましを旅人の
あとより晴るゝ野路の村雨

といふ歌もある通り、成功を急ぐのは、決して成功をもたらす所以ではない。有名なローマ衰亡史を書いたギボン(三)は、そ

(一) Charles Robert Darwin. イギリスの自然科學者。進化論、遺傳の法則を唱へた。(西紀一八〇九—一八八二年)

(二) Oliver Goldsmith. イギリスの詩人。(西紀一七二八—一七七四年)

(三) Edward Gibbon. イギリスの有名な歴史家。ローマに遊んで衰亡の跡をしのび衰亡史を著した。(西紀一七三七—一七九四年)

の第一章を三度書直して、始めて滿足したと言はれてゐるが、全篇を完成するのに、實に二十五年の歳月を費したのである。

ンボギ

人間はいかに努力勉強しても、若し勞苦その物に快樂を覺えるならば、決して過勞といふ現象の生ずるものではない。過勞といふ現象の生ずるのは、畢竟成功を急ぐか、または勤勉勞苦に興味をもたぬからである。それ故アフリカの探檢家のスタンレー卿(一)も「たとひどんなに激しい仕事をしても、しつかりして、規則正しく進んで行くならば、決して身體を害するものではない。」と言つて

(一) Henry Morton Stanley. イギリスの有名なアフリカ探檢家。(西紀一八四一—一九〇四年)

ゐる。實際若し過勞の爲に病氣になつた人があれば、それはその人が仕事に對して興味を少しももたなかつた證據だと言つてよいであらう。

（小酒井不木の文に據る）

(一)小說家、醫學博士。名は光次。愛知縣の人。昭和四年歿、年四十。

(二)實業家、電氣學者、工學博士。明治元年山口縣に生れた。

(三)West Orange. アメリカのエセックス州の一都會。西紀一八八七年以來エヂソンは此所に研究所をもつてゐた。

自修文

エヂソン

中原岩三郎

大正八年の十二月、私はウェスト・オレンジにあるトーマス・エヂソン翁の研究所を訪れた。發明王エヂソン、人類の恩人エヂソン——エヂソン翁こそ、電氣研究者としての私が、一生に一度でもよいから會つてみたいと思つてゐた人である。研究所の事務所のベルをぐつと押すと、若い書記らしい男が出て來た。

「御用は……。」

「エヂソンさんにお目にかゝる御約束で……。」

署名帳　めい〳〵の姓名を書いた帳面。有名無名の人名高い人とさうでない人。

研究の世界の外には云々　研究以外の事は一切しない。

(一)bed. 寢臺。

(二)insp ration. 神の靈を吹きこまれでもしたゝ樣に感ずること。霊感。

訪問者の署名帳を繰つて見ると驚いた。學者、政治家、實業家等、世界のあらゆる方面の有名無名の人の名が、よくもかうまで集つたものだと思はれる程ずらりと肩を並べてゐる。

エヂソン

「はあ、御面會ですか。先生は今晝寢の最中ですよ。えゝ、この奥に寢てゐるんです。もうすぐお目覺めでせうから、それまで暫くの間、研究所の方を御案内致しませう。」

エヂソンの生命は研究だ。翁は研究の世界の外には、殆ど一歩も踏出さない。そして發明は翁の生命の糧だ。夜でも晝でも、研究に疲れて來ると、翁は事務所に備へ附けられたベッド(一)の上に、無造作にごろりと横になつてしまふ。夢幻の間にふと湧起るインスピレーション(二)——それが、或はエヂソン

(一)Hint. 暗示。

(二)motor. 電流で廻轉運動を起す機械。電動機。

目まぐるしい 目ざはりになつてうるさい程な。

うち見た所 ちよつと見た所。

(三)Joseph Allison Steinmetz. アメリカの科學者。(西紀一八七〇—一九二八年)

翁の偉大な發明のヒントになつた事があるかも知れない。それとも翁は、唯精力の泉を、しばしの睡眠に求めるのだらうか。

「さあ、どうぞこちらへ。」

研究所と言つても、案内された所はまるで大工場だ。モーターのうなり、機械の目まぐるしい動きのうちに、三十人からの翁の助手と、大勢の職工とが、油にまみれて働いてゐる。研究所をぐるりと一巡りして、元の事務所に歸つて來ると、腕時計は一時間たつぷり廻つてゐた。

エヂソン翁はやつと目を覺して、私を迎へてくれた。七十四五歳だつたらう、四角な、平べつたい顔で、灰色の目が鋭い。だが、うち見た所、平和な、もの靜かなお爺さんだ。質素な黒つぽい背廣服が、一層翁の人がらをゆかしく見せる。

翁に會ふ前、私は有名な電氣學者スタイメッツ博士にも會つた

學者肌の人 學者らしい氣風のある人。

叩き上げる 努力してしとげる。

割出す もとづいて考へ出す。

が、博士と翁とではまるで感じが違ふ。スタイメッツ博士は純然たる理論の大家といふ氣がしたが、エヂソン翁は決して學者肌の人ではない。翁は理論家ではない。實驗の方からこつ〳〵と叩き上げて來た人といふ感じだ。翁の驚くべき大發明は、晝も夜も殆ど一瞬も弛みのない研究、書物の上から割出すのではなくつて、實驗の上に實驗を重ねた結果、完成されるのであらう。電燈、活動寫眞、蓄音機、その他數へ切れぬ程の發明は、恐らくみんなかうした翁の天才的頭腦と、尊敬すべき努力の「手」とから生れ出て來たのであらう。

「今何を研究していらつしやいますか。」

と問ふと、

「蓄電池の研究をやつて居ります。」

と答へた。

沒頭する　もつぱらその事にたづさはる。熱中する。

躍如　をどりたつさま。

(一) Siren. 號笛。

黃昏の帳が云云　夕暮になつて窓が暗くなるのをいふ。

これは翁の助手から聞いた話だが、翁は研究に沒頭すると、時間も、食事も何もかも忘れてしまふとの事。エヂソンの全精力は、その時唯研究の一點にのみ集中されて、その頭腦は神の樣に働き出す。エヂソンはもう完全に「發明の世界」に融けこんで、この一個の小さい人間は、こつ〳〵と、限りない宇宙の神祕の謎を、綿密な科學の力で解きほぐさうとする。此所に發明界の巨人エヂソン翁の姿が躍如とする。

正午のサイレン(一)が高らかに鳴響く。しかし、エヂソンはパンも水も忘れ切つて、唯無意識に机の引出から煙草を取出して、傍からは、やけに見える樣に吸ふ。研究所の近くの自宅から、奥さんが迎へに來る。

「御飯で御座いますよ。」

エヂソンはやつと我に返る。夕方になる。黃昏の帳が窓を包んで、

俗界　發明の世界に對して日常の生活をいふ。

時間の觀念を云々　時間の考がない。時間に左右されない。

三百六十五日　日常の意。

電燈がぱつと一時に輝く。エヂソンはそれも知らない。また奥さんが迎へにやつて來る。

「あなた、御飯で御座いますよ。」

奥さんの聲に翁の魂はまた俗界に呼戻される。時間の觀念を超越したエヂソンは、社會の人々がみんな寢靜まる頃になつても、まだ研究を止めない。例によつて奥さんが呼びに來る。

「あなた、〳〵、もうお休みなさいませ。」

エヂソン翁は漸く家庭の人となる。これがエヂソン翁の三百六十五日だ。

私はこの偉大な發明家の幾十年もの撓まぬ努力に、おのづと感謝の念が湧いて、思はず頭を垂れた。

「では御機嫌よう。」

握手を交して門を出て、振返つて見ると、もうエヂソン翁の影は

(一)西紀一八七八年。
(二)Scientific American.（科學のアメリカ人）といふ有名な通俗科學雜誌を發行してゐる所。
(三)handle.

なかつた。その時ふと私は翁の逸話を思ひ出した。

翁が蓄音機を發明した時、翁はそれを抱へこんで、或雜誌社の編輯局にやつて來たで、社員は早速應接間へ案内して、來意を尋ねた。しかし、翁は一言も發しない。編輯員一同が奇妙に思つてゐると、やがてエヂソンはポケットから小さな機械を取出して、机の上に置いた。そして默つてハンドルを廻すと、その機械が忽ち大きな聲を張上げて、

「皆さん、これは蓄音機です。皆さんはこれがお好きですか。」

と叫んだ。始めて聞いた機械の聲。――一同はあつと驚いてしまつた。その間にエヂソンは、またもや無言のまゝその機械をポケットに入れて、後をも見ずに歸つてしまつた。

こんな話を思ひ浮べて、私はエヂソン翁も案外いたづら者だと、微笑ましくなつた。さう言へば、今會つたエヂソン翁の面影の

半面　一方の方面。片
(一)日本の名士が外國の名士に面會した時の印象を集めたもの。東京朝日新聞社編、昭和五年東京四條書房發行。
(二)宗教哲學者、英文學者。早稲田大學教授。岡縣に生れた。明治四十年福に生れた。宗教と哲學と人生、精神生活の基調、聖愛の世界等の著がある。
(三)傳未詳。
(四)淨土眞宗の開祖。俗姓は日野。有範の子。弘長二年（一二六二）寂、年九十。見眞の大師と謚された。
聲名　異端

うちにも、そんな半面がちらと浮んでゐる樣な氣がした。

――(一)世界人の横顔――

一三　怒を慎め

(二)帆足理一郎

僧良辨(三)は親鸞聖人(四)の聲名を聞いてこれを嫉み、且異端を稱へる賣僧、憎き奴と怒氣滿面に溢れ、長刀を突きつけて、今や親鸞を刺さうとしてゐる。聖人は泰然として取亂す事もなく、いきり立つた良辨の顔を暫く見詰めてゐたが、やがてはら〳〵と涙をこぼした。良辨は親鸞ともあらう者が、今更未練の涙かと嘲笑した。親鸞はなほ涙を流しながら言つた、

「いや〳〵、わしはお前のその怒つた姿に、わしの罪深い心

そのまゝをまざ〳〵と眺めて泣くのぢや。お前がわしを殺さうとするその心はわしの心ぢや。わしの罪ぢや。」

良辨は遂に殺意を飜して、逃去つたといふ事である。

(一)イエスの山上の垂訓にある(二)「惡に敵する勿れ。」の敎は、今親鸞のこの實話の中に最もよく體現されてゐる。イエスも、彼は「怒を愼め。」「汝の敵を愛せよ。」と敎へた通りに、敎敵が彼を捕縛しようとした時、弟子たちは刃を執つて反抗しようとしたが、イエスは彼等を押止めて、何の反抗もさせなかつた。

古來、偉人聖者は惡に敵する事なく、寧ろ惡に報いるに善を以てし、それで惡を滅さうと努力して來た。惡を抑へる爲に惡の手段を以てする事は、なほ惡の存在價値を認める樣

(一)Jesus Christ. キリスト敎の祖。(西紀前四—西紀三〇年)
(二)新約聖書マタイ傳第五章、第六章、第七章をいふ。

なものであつて、惡の效用性が認められる間、惡は決して滅びない。古來、聖賢は惡を徹底的に自滅させる方法を敎へてくれた。それは、如何なる場合にも、惡を滅す爲に惡を用ひない事だ。人が怒つたのに對して自分も怒れば、怒はなくならず、却つて二倍になるだけだ。人の怒を消す妙藥は、こちらから怒を以てこれを迎へない事である。さすれば、人の怒はそれだけで自滅する。

體驗(迪)

私は嘗て或青年の體驗を書いた一文を讀んだ事がある。その概略を言へば、この青年が或時、夜分路地の狹い所を通つてゐた。向ふから誰か同じ道をたどつて來る者がある。狹い石を並べた歩道で、兩側は稍低くなつてゐる。どちらかよ

けなければ、他方は敷石の上を通る事が出來ない。この青年はこちらでよけるべきか、或は先方でよけるだらうかと考へながら近づいたが、向ふの紳士はよけさうもない。「何だ小癪な。彼も人だ。おれも人だ。こちらでよける必要はない。」と、氣をいらだゝせながら、わざ〳〵力まかせに、ぶつつかつてやつた。先方はきつと怒るだらう。怒つたら喧嘩さ。最後までやつてやれといふ意氣で、わざ〳〵先方を突飛したのであつた。所が豈圖らんや、「どうも失禮致しました。私は少々眼が惡う御座いまして、飛んだ失禮を致しました、お怪我はありませんでしたか。どうぞ御免下さい。」と再三わびられて、青年は涙ながらに自分の不遜をうち明け、重々その人に謝罪した

(一)史論家。名は彌吉。靜岡縣の人。大正六年歿、年五十四。新井白石、源頼朝、勝海舟等の著がある。

(二)兵庫縣（播磨國）赤穗郡。城主は淺野内匠頭長矩。

(三)元祿十四年（一三六一年）三月十四日長矩は吉良義央を江戸城中で傷つけた。

(四)名は滿堯。四十七士の一人。

(五)名は重實。討入の前自殺した。

(六)通稱内藏助。自盡

(七)名は元辰。四十七士の一人。

といふ事である。

いかなる怒の刃も、謙遜には刃が立たぬ。イエスは訓へてゐる、「汝を詛ふ者を祝し、汝を憎む者を善視し、汝を迫害する者の爲にその善を祈れ。」と。然り、善のみが惡を滅し、愛のみが罪を悔い改めさせる妙劑である。

——雄辯——

一四　大石良雄　その一

山路愛山(一)

赤穗(二)の城下は早駕籠の爲に大騷となりぬ。江戸(三)城中刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衞門(四)、壹野三平(五)は直ちに駕籠に乘りて、日に行くこと三十里、五日にして赤穗に達し、變を國老大石良雄(六)に報じたり。長矩自盡の命下るや、原惣右衞門(七)、

(一)名は信清。四十七士の一人。

衆情恟々

門閥

庸愚

器局

光を韜む

隱然

大石瀨左衞門(一)は更に同じ早さを以て赤穗に達したり。君家事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たぐふ者なく、しかも溫厚にして庸愚なるが如き大石良雄は、茲に始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜める彼は、衆人に驚異せられぬ。赤穗城中の會議は開かれたり。事情は愈明白になりぬ。大野黨の一團は隱然として分れぬ。大野九郎兵衞は良雄と同じく赤穗の

城中會議（尾竹國觀筆）

恭順

城を枕にす

左祖

(一)今大垣市。城主戸田采女正は長矩母方の從弟。

家老にして、班は良雄の下にありしが、長矩に寵用せられ、且年老いて事に馴れたりしかば、勢力は却つて大なりき。彼は專ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、なるべく溫和に城を明渡さん事を主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり、「先づ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめん事を幕府に請ふべし。」と。

越えて二日、城中の會議はまた開かれたり。良雄は前說を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の說に左袒せり。(一)大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふ事の、却

(一)元祿十四年。

籠城

殉死

難に投ず

血沸く

つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。(一)四月十二日大野は遂に遁逃せり。人は減ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の說を執れり。復讐の說は勝てり。血判に與る者百十餘人、そのうち江戸より來つて難に投ずる者僅かに十八人。

道路は清潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日、赤穗城の上より受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり。翌日、城は難なく明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穗藩士の餘りに溫和な

(一)今京都市東山區。

優游自適

四通八達の地

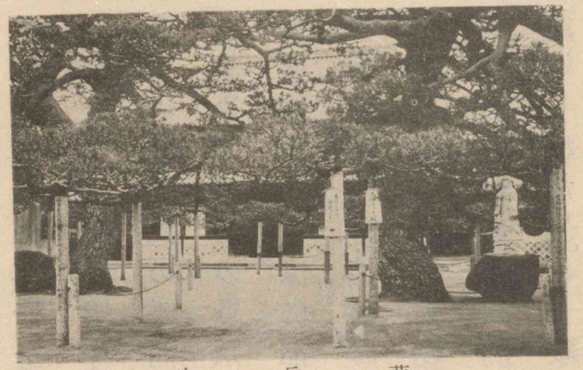
天下の視聽

(二)羽前(山形縣)米澤侯。吉良家の親戚。

諜者

(三)江戸本所松坂町。

るに驚きたり。



華岳寺

良雄は京都の山科(一)に住して、優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて、永住を裝へり。彼はかくの如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏(二)の諜者を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護する事に努め、人を遣して吉良氏の邸(三)を守らしめ、且その

采邑

(一)長矩自盡の日。
(二)赤穗町大字上假屋。舊赤穗城址内にあつて淺野家三代の菩提寺。
(三)昔、京都の四條河原で祇園祭禮の日（六月七日）から十二日間行はれた納涼。

采邑の人にあらざれば婢僕に用ふる事なからしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

年は暮れぬ。記憶すべき三月十四日は再び來りぬ。赤穗の華岳寺(一)は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し鶯は老いて、四條河原(二)の夕涼に都人の群集雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國、破廉恥の誹謗は愈良雄の頭を壓せり。しかも彼は恬として關り知らざるものの如し。

破廉恥誹謗恬として關り知らず

(四)通稱忠左衛門。一黨の故老で、良雄に代つて江戸にある同志の統領となつた。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮(四)より來る。言ふ「長廣藝州に預けられたり。」と。一縷の望は絶えぬ。この時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣に

一縷の望義氣金鐵の如し

(一)石東源五兵衛
(二)通稱主税。
(三)江戸麻布我善坊。

よりて君家の或は再興せられん事を希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、また復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等にその眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。この年夏、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石東氏(一)に託し、ひとり長子良金(二)を携へて江戸に向ひぬ。

一五　大石良雄　その二

吉良氏の防衛は尚密なりき。彼はその本所の邸を以て卑濕なりとし、これを修補するまで、麻布(三)なる上杉氏の別邸に

刺客

餘命おぼつかなし

一死を賭す

(一)今神奈川縣橘樹郡御幸村字平間。

住へり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟まさんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。しかも良雄は聽かざりき。

良雄父子は直ちに江戸に入る事を敢へてせざりき。彼は先づ池上の平間(一)村にありて、吉良氏の動靜を窺ひ、十一月五日に至つて漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎兵衛、同佐内と名のりぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年はこれを窺へり。彼等は何所より來つて、何所へ去

五更

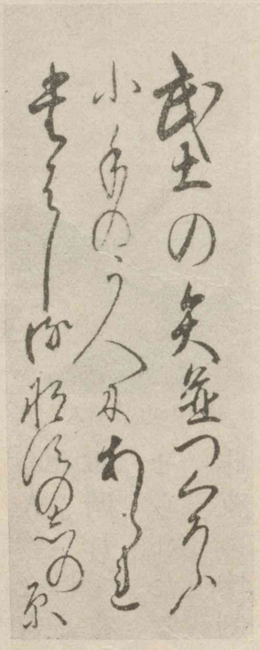
(一)通稱勘平。

武士の矢並つくろふ小手のうへにあられたはしる那須のしの原

(二)今東京市芝區高輪。曹洞宗。

霏々

るを知らず、五更に至つて他の一隊と交代せり。流石の吉良氏もこれに氣附かざりき。しかも間諜、探偵すべて功を奏せず、祕密は却つて吉良家に出入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。



大石良雄筆蹟

義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は卽ち定まりぬ。

十四日の朝、良雄は泉岳(二)寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

この夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事裝束せる四

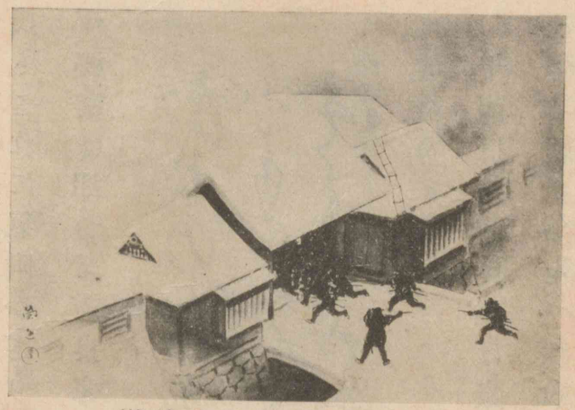
鬪諍叫喚

清暉

喧噪

十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞えたり。既にして再び笛は鳴れり。火事裝束せる四十七個の人物は、吉良邸を出去れり。時に雪晴れて、夜は全く明けたり。蹂躙せられたる邸内の積雪のみ、獨り昨夜の慘劇を物語りをれり。

清暉は輝きわたれり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは城をさして急げり。忽ち聞く、路人の喧噪なるを。始



義士討入（小山榮達筆）

義士引揚げ

田代古崖筆

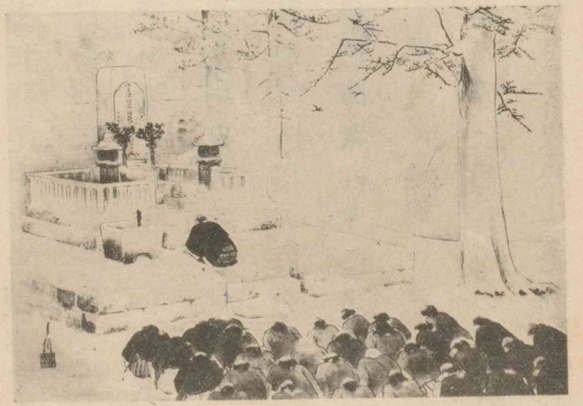
風說區々
飛語紛々

(一)通稱助右衛門。
(二)但馬國出石の城主久尙。

めて知りぬ、赤穗の浪士が吉良氏の邸を襲うて、義央の首を獲たるを。

風說は區々たり。飛語は紛々たり。いはく、吉良氏を襲ひし者は獨り四十七人に止らず、この外尙黑裝束をなせる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。いはく、上杉氏の兵は四十七人を追擊せり。いはく、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとすと。

良雄は吉田兼亮、(一)富森正因を大目附仙石伯耆守(二)の第に遣



仇首を墓前に捧ぐ(尾形月耕筆)

官裁

りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みてその志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。人あり言ふ「上杉氏の衆至る。」と。良雄は同志を警めて防禦の備をなせり。而して上杉氏の衆は遂に來らざりき。

泉岳寺義士の墓

この日、良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細

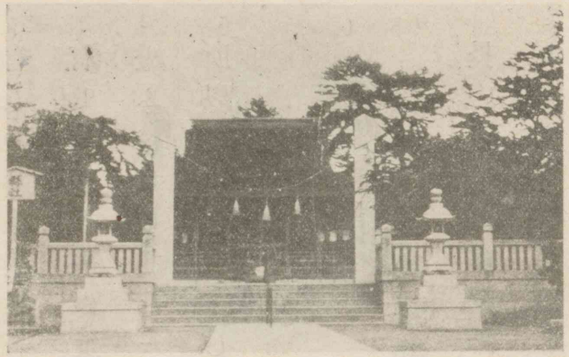
自裁

溫藉

長者たる品位失墜す

川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の杯を賜へり。良雄は他の十六人と共に幕府の檢使の前に自裁せり。



大石神社

良雄は外溫藉にして、內に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事もうち靜めて、騷がしき事を嫌ひたりき。彼はいかなる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒に平和を愛する

者にあらずなすべき事は必ず成遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者(一)の表面と、戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職としてこの品性ありしに由れり。

——愛山文集——

主一

(一) stoics.

一六　多摩御陵に詣でて

長い間、私は多摩御陵を拜したいと思ひ續けてゐながら、その機會を得ませんでしたが、今日はとうとうその志を果しました。

中央線の淺川驛(一)で下りるとすぐ甲州街道に出て、東へ約十一二町進み、其所から七間幅の廣い參道を、私は緊張した心持で歩いて行きました。驛から出る乘合自動車もありますが、乘物で御陵近くまで參るといふ事が憚られました。淺川の清流に

大正天皇

架けられた南淺川橋を渡つて、北へ進んで行くと、やがて一基の大鳥居を前にして、遙かに高くなだらかな圓い丘が見えました。これが明治大帝の御治世に次ぐ大正の新時代に君臨せさせ給ひ、御父大帝の御遺業を御繼承あそばされて、世界に於ける我が國の地歩を一層進めしめら

一基

(一) 東京府南多摩郡淺川村。東京の新宿驛から四十二キロメートル。

(一)第百二十三代。

渙發す

萎靡沈滞

(二)神奈川縣(相模國)三浦郡葉山町の御用邸。

動靜

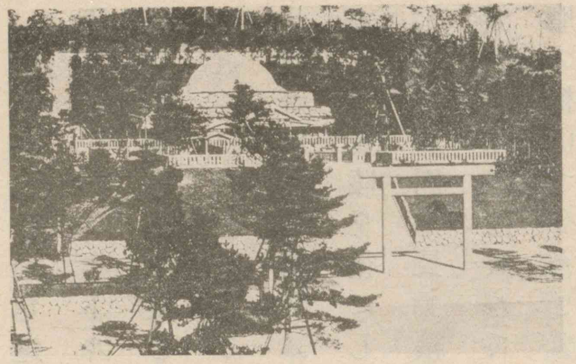
れた大正天皇の神靈が、永へに鎭まります御陵であります。その御一生は、とかくに御病身であらせられたにも拘らず、歐洲大戰といふ世界的大事變に會して、善く日本の進路を定めさせ給ひ、大正十二年の關東大震災後には、國民精神作興に關する詔を御渙發あらせられ、不測の變に遭つてその趨く所に迷つた帝都の人々を、萎靡沈滞の淵から救はせられたその御偉業の蹟をしのび奉つて、私は御陵の前に額づいたまゝ、暫く頭を上げる事が出來ませんでした。心を靜めて拜しまつるうちにも、天皇が葉山に御療養あそばされてゐた當時、今上陛下や皇太后陛下、或は御親子、御兄弟の間がらにあらせられる宮樣方の御動靜が、畏くも下々の家庭に

斂葬

(一)秩父宮雍仁親王殿下。大正天皇の第二皇子。

(二)高松宮宣仁親王殿下。大正天皇の第三皇子。

玄宮(佇)



多摩御陵

も見られない程の御肉身の御情愛に滿ちさせられてゐた御事など、或は天皇の崩御當時、全國民が、今は心を籠めた御平癒の祈願もかひなくなつた悲しみを胸に抱いて、相共に今更の樣に御聖德の數數をしのび奉つて、慰め樣もない切なさを僅かに紛らさうとした事などを思ひ出して、つい眼頭が熱くなつて來たからです。御斂葬の時に、秩父(一)、高松(二)の兩御兄弟の宮が、玄宮の御前近く御たゝずみになつたまゝ、容易にお立去りにならな

かつたと傳へ奉るお話が、またしみ〴〵と回想されました。

漸くに御陵前を退下して稍遠く仰ぎ見ると、兆域二千五百五十平方メートル、かの奈良時代文化の基を開かせ給うた聖德太子の御墓と御形式を同じうしてゐるといふ御陵の近くには、鬱蒼たる常緑樹林や雜木林を帶びた長房山の丘陵が迫つて、物音一つない閑寂境の上に、白い雲が浮んでゐます。御陵を後にして前面を望むと、さつぱりとして綺麗な一脈の岡が長く續いてゐます。これは萬葉集に「赤駒を山野に放し」と詠まれて以來、歌の名所として知られてゐる多摩の横山で、今もこの邊一帶の村名を横山村と呼んでゐます。快く晴れた西の空遠く富士ケ嶺の秀麗な姿が望まれ、近

(一)第三十一代用明天皇の皇太子。御名は厩戸。推古天皇の二十九年(二八一年)薨、御年四十九。

(二)東京府南多摩郡横山村大字下長房

(三)赤駒を山野に放しとりかひにて多摩の横山のしゆかやら(字運部黒女)

くは紅葉の勝地として聞えた高尾山が仰がれます。私は始めて見るこの眺望、武藏野の名殘も懷かしいこの山川の景勝に接して、うつとりと立ちつくしました。

御父大帝の御血を享けさせられて、和歌の道を好ませ給ひ、

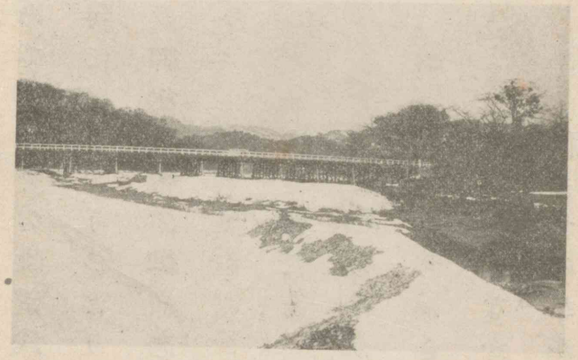
ゆたかにも雪ぞつもれる秋津洲
めぐりの海は朝なぎにして

冬ながらかきねのくさももえいでて
たなかのいほの梅の花さく

神まつるわが白妙のそでの上に
かつうすれ行くみあかしの影

(一)淺川驛の西南四キロメートル。全山密林に蔽はれ頂上は眺望甚だよい。海拔六〇二メートル。

などの御秀歌を御遺しになつた天來の詩人であらせられる天皇は、靜かな永遠の御まどろみのうちに、この勝景をいかに御心往くばかり御賞美あそばされてゐる事でせう。御代々の帝都が多く畿内の地に限られてゐた關係上、御陵と申せば山城、大和を中心とする地方に定められてゐたのが、思ひも懸けず奥武藏の地に大正天皇の御陵を拜する事となつたのは、お膝下にゐて御英姿を拜する機會の多かつた天皇をしのび奉る帝都



南淺川橋

の人士に取つては、せめてもの心頼みでせう。

歸路に就いて、再び南淺川橋を渡りながら顧ると、御陵の邊はもう半ば黄昏れてゐました。秩父おろしの空風は、橋の袂の尾花を一頻り靡かせて、川の面を吹いて行きます。私はしつかりと襟を搔合せて、橋を離れました。

一七　新年

暦の改ると共に、人は一歳づゝ年を取るのであるが、實際は、その度に生れ變つて、若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、

過去は水に流して行く
手に光明を求む
處世

人の行爲には缺點もあり、失策もある。それを何時までもくよくよしてゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行く手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてそれの好機、卽ち年の改る日である。

我が國には、昔から大祓といふ祭式によつて、過去のあらゆる罪を一掃し、汚れた心をうち棄てゝ復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、卽ち我が國民は、一年に二回づゝ心身共に新たになつて、復活し來つたのである。この大祓の式は今でも行はれてゐる。就中十二月は、年も新たになる前であるから、この復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。

春秋に富む
還曆
古稀
簡樸

其所で我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出來るだけ一切の物を新たにし、清くして、形の上にもこの復活の義を表す事に努めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還曆に入り、古稀に達する老人でも、その生れ變る心持には異なる所がない。

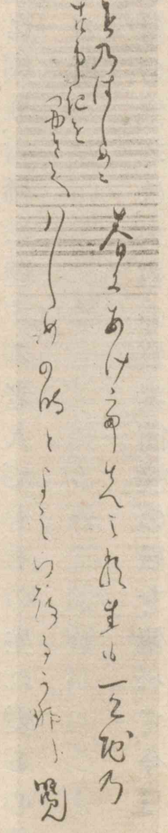
正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩や、讓葉や、白木の三方や、土器や、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返して行く所に妙味がある。卽ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出して行くのである。祖先から傳はつた掛物を掛けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

宗家
四方拜
元始祭
内外臣僚

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於ては、我等が一家に於て家の祖先を祀ると同樣に、新年には四方拜や元始祭を行はせられ、また内外臣僚を召させ給ひて拜賀を受けさせられ、御宴を賜ひなどし給ふ。これを思へば、我等は今の世ながら直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずにはゐられぬ。余は橘曙覽(一)の

春にあけてまづ見る書も天地の
はじめの時とよみ出づるかな

(一)歌人。越前の人。明治元年歿、年五十七。
(二)古事記のこと。



橘曙覽筆蹟

といふ歌を、早くから深く感心してゐた。これ、かの元朝(一)や神代のこともおもはるゝと同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬのである。

一八　たのしみは　　橘曙覽

たのしみは妻子睦ましくうち集ひ
かしらならべて物を食ふ時
たのしみは朝起出でてきのふまで
なかりし花の咲ける見る時

(一)荒木田守武の句。

たのしみは常に見馴れぬ鳥の來て
　軒とほからぬ樹に鳴きし時

たのしみは物識人に稀にあひて
　いにしへ今をかたり合ふ時

たのしみはそゞろ讀みゆく書の中に
　われとひとしき人を見し時

たのしみは三人の子供すく〳〵と
　おほきくなれる姿見る時

たのしみは稀に魚煮て子らみなが
　うまし〳〵といひてくふ時

たのしみは家内五たり五たりが
　風だにひかでありあへる時

たのしみは神の御國の民として
　神のをしへを深くおもふ時

——橘曙覽全集——

(一)英學者。第一外國語學校長。文久元年(一八六一)愛媛縣に生れた。無絃琴、聲、人生と趣味等の著がある。

(二)支那の五代の一國で、後北宋、南宋に分れた。十八主三百二十年で元に滅された。

(三)北宋の第六代の君主。元豐八年(西紀一〇八五年)歿、年三十八。

(四)名は襄。宋の仙游の人。眞面目で議論が正しかつた。また詩文を善くし書に巧で、書は當時第一の譽があつた。

一九　神と地獄極樂

一神　村井知至(一)

宋の神宗(二)皇帝(三)の時、蔡君謨(四)といふ人があつた。非常に髯の

いゝ人で、胸のあたりまで垂れる長い厚い立派なものであつた。或時神宗皇帝が彼に向つて、

「お前は夜寢る時に、その髯を夜著の中に入れて寢るか、それとも外に出して寢るか。」と尋ねられた。

蔡君謨は突然こんな問をかけられたが、さて自分ながらどうして寢るのか氣が附いてゐなかつた。それでその場はいゝ工合に濁して、その晩家に歸つてから、どうかしらと試驗してみた。

その場を濁す

最初、髯を夜著の外に出して寢てみたが、何だか工合が悪い。これは多分中に入れて寢てゐたのだらうと思つて、夜著の中に入れてみると、これもまた何となく變である。其所で一晩中、髯を出したり入れたりして、遂に安眠が出來なかつたといふ。

人には自分で日常やつてゐる事に、何も氣附いてゐない事が多い。知らずにこれをやつてゐる事が多い。蔡君謨の如きはよい例であつて、神宗皇帝から言はれてひよいと氣が附き、さてあわててこれを試みると、その何れであるか、分らぬ樣な事が多い。

顯現

神を知らぬといふ人が、神を知つてゐる者である事がある。かの夕顏棚の下にあつて、親子相樂しく笑ひ興じながら、涼氣を悅んでゐる平和は、神の顯現であるのである。親にも子にも神が宿つて、その神が歡樂無限の世界を現出してゐ

狼狽

るのである。しかも彼等はそれを知らない。これを他から「お前には神が宿つてゐるが、その神は何か。」と問はれると、蔡君謨の樣に狼狽するのである。

無知は却つて平和である。安心である。知つて却つてこれに悶える樣になるのは不幸である。けれども、眞の大安心、大立命は、知つて而して元の無知に還るにある。

萬人皆神を有するものである。神は萬人の胸に宿つてゐる。唯それを人が知らないのである。これあるを知つた時、驚きまた狼狽する。けれども眞にこれを知了した時、人はまた元の無知に還つて、元の平和に復するのである。蔡君謨はその髯をいかにして寢るかを知つた時、始めて悠々樂々と眠

(一)歴史小説家。名は靖。舊幕臣。江戸の人。大正六年歿、年七十。最上川、山田源右衛門、北條早雲、伊達政宗等の著がある。

(二)東京市品川區北品川にある。臨濟宗の寺で、澤庵和尚が台命を奉じて寛永五年(一六二八年)に開創した。

(三)臨濟宗の高僧。本名は平宗彭。但馬の人。將軍家光の信任が厚かつた。正保二年(一六四五年)寂、年七十三。

(四)名は成之。粗暴不羈で黨を結んで、暴客幡隨院長兵衛を殺し、俠客藉で、亂狼を復讐せられ、事幕府に聞えに(二)死寛文四年(一六六四年)

る事が出來た。これと同樣に、人は我が神を知得した後に、始めて安らかに世が渡られるのである。

——人生と趣味——

二　地獄極樂

塚原澁柿園

品川東海寺(二)の澤庵(三)和尚は、道德高く、眼識また明らかなれば、諸人尊び敬ふ事限りなし。その頃旗本に水野十郎左衛門(四)といふ者あり。これを聞きて言へるは、「何條澤庵なればとて、いかでさる學德あるべき。人々餘りに尊信して賞めたゝふる故、圖に乘りて樣々の事を言ふならん。我出で會ひなば、頭からやりこめて、なか〳〵口は開かすまじ。」と、常に腕を扼せられけり。さる程に、或日謀らず澤庵に會ひければ、水野てぐすねして問ひける樣、「地獄、極樂は實にあるものかないもの

を賜はつた。

後生を願ふ

か。」澤庵答へて曰く、「我もまた知らぬなり。」水野問ふ、「その有無も知れざるに、後生を願へと勸むるは何事ぞ。」澤庵曰く、「貴所は雨降の日他出せらるゝに、そのしたくはいかにし給ふ。」水野言ふ、「從者に傘をさしかけさせ、合羽を著て、馬上にて出づるなり。」「然らば從者の方々はいかに。」「從者もまた笠合羽にて我に從ふなり。」「然らば晴の日はいかに。」「笠も合羽も用ひぬなり。」「若し急に雨降來らばいかに。」「その用意にとて、雨具籠を持たすなり。」「雨具籠を持たせられても、雨降らざる時はいかに。」「降らざる時は唯持たせて歸るなり。」「降らざるに豫て持たしめらるゝは無益ならん。」水野笑つて、「降ると降らぬとが最初より知らるればその世話はなけれども、知らざればこそ、無益になりてもその籠を持たすなれ。」と言ふ。

時に澤庵曰く、「その義なり。後生を願ふもそれに同じ。地獄、極樂の有無は初よりしかとは知れねども、なしと思ひて若しありたる時ははたと困る故、困らぬ用心に豫てより願ふなり。あると思ひてなき時は、無益になるともせん方なし。」とありければ、我慢の水野も、尤もとて閉口せられけり。

(一)歴史家、文學博士。臺北帝國大學總長。明治三年大阪府に生れた。世界小觀、朝鮮史話、世界の變遷を見る等の著がある。

(二)Potsdam. ドイツの首府ベルリンから西南約三〇キロメートル。風光明媚の地。

(三)Sans-Souci. (莫愁城)

(四)Frederick the Great. フレデリック・ウィリヤム一世の嗣。(西紀一七四〇—一七八六年)

二〇　フレデリック大王と酒井備後守

幣原坦(一)

ポッダム(二)のサンスーシ宮(三)は、フレデリック大王(四)の記念に充ちてゐる。昔大王が此所を居城としてゐた時の事、清楚な境

路頭に迷ふ

内の樹蔭濃やかな間に、ぎい〳〵と音を立てて、靜寂を破る音がした。大王は侍臣に向つて「あれは何の音か。」と聞いて、宮門の向ふにある風車の響である事を知られた。そこで風車の持主に諭して、これを取去らせる事にした。

大王の機嫌を損ねた風車

ところが持主が言ふに、「この風車は私が先祖から傳へられた唯一の財産で、一家はこれによつて漸く生計を立てて居ります。今これを取去られては、忽ち路頭に迷はねばなりません。それでも是非取去れとの仰ならば、一應公平な

裁判を受けたいと思ひます。」

侍臣は大いに腹を立てた。大王は笑ひながら「そのまゝにしておけ。」とばかりで、一向咎めもなさらなかつた。當時の人はこれを聞いて、大王の寛仁大度に感じたといふ。これは有名な話で、今にその風車も保存されてゐる。

しかし、あながちその樣な話に、日本人は感心する程の事はない。足下を見れば、それと同じ樣な、尙それよりも美しい話が隨分ある。責而者(一)帥卷の十一に、藩翰譜(二)を引いて酒井忠利(三)の事を述べて、次の樣に言つてゐる、

酒井備後守忠利の領内に、備後といふ百姓があつた。忠利の家來はその百姓を呼んで、「お前はこの領内に住んでゐな

あながち

(一)佐倉藩士澁井徳章の編著。四十二卷。江戸時代の明君賢臣の善言嘉行を諸書について集錄したもの。

(二)新井白石の著。十三卷。一萬石以上の諸侯三百三十七家の傳記沿革等を記したもの。

(三)德川家康の重臣。正親の第三子で備後守と稱した。寛永四年(二六八七年)、寛永十六年(二六三九年)。

年貢
公役
かりそめにも

がら、殿様と同じ名を冒してゐるのは不都合であるから、早速改名するがよい。」と言つた。百姓はこれを聞いて、歎いて言ふに、「私は人よりも一層早く年貢を納め、月々の公役をば、かりそめにも怠つた事はありません。さうして永く此所に住みつきまして、代々備後と名のり、正直者の備後で通つて居ります。今これを改名せよと仰せられましても、俄にはかなひません。何とか殿様の御名を改めて戴くわけには参りますまいか。」

家來は大いに腹を立てた。忠利はこれを聞いて、「よし〳〵。年貢をよく納めて公役を怠らないのは、神妙の至である。さらば彼は其所の備後であるぞ。そのまゝで苦しうない。」

包容愛撫
符節を合す
稱揚
宣傳
顯彰

徳川家康がこれを漏聞いて、「世間の愚かな人は、何でもない事に人を苦しめて、己の威を立てようとし、無益な事に拘つて、有用な利を失ふものである。然るに忠利は天性和やかにして、仁愛の情深く、智慧もまた少くない。彼の子孫は必ず繁榮するに相違なからう。」と褒めたといふ。

この東西の二つの話は、事實こそ多少違ふけれども、寛仁大度の明君が、正直な民を包容愛撫する麗しさは、恰も符節を合するが如くである。フレデリック大王の事蹟は世界の人に稱揚されて、備後守の事蹟はこれを知らぬ人が多い。自分はフレデリック大王を宣傳する前に、備後守を世界に顯彰したいと思ふのである。

(一)國文學者。第五高等學校教授。明治九年福岡縣に生れた。よくぞ男に、詩趣を加味して詩味情味等の著がある。

(二)黒田如水のこと。如水名は孝高。播磨の人。豐臣秀吉の謀主となり、後德川氏に從つた。慶長十年(一六〇四年)歿、年五十九。

老女　武家の奥向の侍女の長。

上女中　主人の側近く仕へる下女。

黒田如水

八波則吉

「あれ、大殿(二)様のお召だ。誰ぞゐないの。お松、お和歌、お由……あゝ誰もゐないの……。」

と、老女の菊代は頻りに上女中の名を呼んでゐるが、生憎誰も居合せないのか、返事がない。

奥座敷では、がらん〳〵とけたゝましい鈴の音。

「はい〳〵、只今……。」

老女の菊代が恐る〳〵御前へお伺する。

「お前ぢやいけない。若い者を呼べ、若い者を。」

床から上半身を摩出した老公、目は血走つて、手はわな〳〵と震へてゐる。

「只今、生憎誰も居りませんので……。」

辨ずる　わかる。とゝのふ。

腰板　障子などの下部に張つてある板。

病みほゝけ　やまひの爲に愚かになること。

茶坊主　昔武家などで茶の湯の事を掌つた者。

小姓　貴人の側近く給仕する少年。

生傷　新しいきず。

「誰もゐないどうしたと言ふのだ。」

「何ぞ私で辨じます御用ならば……。」

「いや、お前ぢやだめだ。だめだと言ふのに……。」

と言ふが早いか、老公は枕頭にあつた茶托を、老女目がけて投げつけた。茶托は危く老女の肩先を掠めて、障子の腰板に當つた。

「また始つたな。」と、庭男の喜作は眉をひそめて、箒と塵取とを持つたまゝ、こそ〳〵とお庭の隅へ隱れた。

病みほゝけとでも言ふのか、寛仁大度の如水公が、この夏以來掌を反した樣に、打つて變つた癇癪持になつた。女中を叱る。老女を叱る。茶坊主を叱る。叱るだけならまだしも、二言目には打擲する。

女中も小姓も生傷の絶間がないで、大殿樣の前へ出るのは、誰も彼もびく〳〵ものでで、言はば虎の尾を履む命掛の覺悟である。

家扶　貴人の家にあつて家務、會計を司どる人。

(一)秀吉に仕へて屢〻戰功を立て、征韓の役にて殊功があつた。關ヶ原の役に東軍に屬し、役後、筑前五十二萬石に封ぜられた。元和九年(二年五八三年)歿、十六。

家中　大名(或は小名)の家來の全體。

「困つた事だ。」と老女は思つた。

「怖い事だ。」と女中たちはつぶやいた。

中には母の病氣に事寄せて、お暇を願ひ出た者さへあつた。家扶も家老も持てあまして、とう〳〵若殿樣へ願ひ出た。若殿樣とは黑田長政公の事である。

家扶や家老の願出を聞いて、思ひ餘つた長政公は、一日父の機嫌を見はからつて、

「父上、申し上げかねますが、もう少し家中の者に對して、御寬大に願はれますまいか。」

と諫めた。

如水はにつこり笑つて、

「近う、〳〵。」と長政を枕邊に招いて、小さな聲でさゝやいた、

「わしはもう長くはない。今月か、長くて來月の中旬だらう。家來

衆望　おほくの人望。

(一)國文學者。不盡。酒舍と號した。舊靜岡の藩士。明治四十三年歿。書翰、六十九年成、中古文大文鑑、歌文新說、等の著あり。

たちは平素わしに親しんで、そなたを畏れてゐる。どうかしてそなたに人望がつけてやりたい。わしはどんなに憎まれてもよい。いや、わしが憎まれゝば憎まれる程、そなたに衆望が歸する道理。分つたか……。」

長政の兩眼からはは〳〵と熱涙がこぼれた。

「父上、忝う存じます。」

「あゝ、それでよい。」

と言つた如水は、急に枕頭の鈴を、がらん〳〵とけたゝましく鳴して、人を呼んだ。

二一　歌話

中村秋香(一)

一　とりゐ坂

(一)松平定信。白河の城主、後、幕府の老中となつた。文學を好み、和歌、文章を善くした。(一七四八年—一八二九年)歿、年十二。

(二)江戸城田安門内。

類燒す

落首

すまふ

怪我

(一)白河樂翁公、年十二にて尙田安の邸におはせし頃、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類燒しけり。大火と言ふまでにもあらざりしかど、燒死せし者多かりしかば、

この火事は人の命をとりゐ坂

これより上のとがはないぜん

と落首せる者ありけり。近侍の人々興じ笑ひて、「いかにもよく詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まんにはさは言はじ。」とありければ、奥醫師の某、「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐらするに、「言はじ、〳〵。」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を『怪我の事なり。』と言

(一)櫻町天皇の御代。(一七四四—一七四七年)

(二)江戸時代の國學者。縣居と號した。遠江の人。明和六年(一七六九)歿、年七十三。

狼藉たり

沈思

ふべきなり。」となり。

一句の事にて一首の意味を全く顚倒せしめ、過のやみ難きに出づるを明らかにせられし事、誠に「栫檀の二葉」とぞ言ふべき。

二　あがたの宿

(一)延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中所々の人家破損しけるあけの日、(二)賀茂眞淵翁の許へ、門人某見まひに行きけるに、翁の家も夜來の風にて、屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なる樣もなく、机によりて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな。」と言ふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん、顧て會釋しつゝ、

餘談に及ばず、「この嵐にて一首出で來ぬ。」とて、書きて示しける歌

野分

野分してあがたの宿はあれにけり
つき見に來よと誰にいはまし

三　燒野の原

天明の火災にて、(一)小澤蘆庵(二)が家危くなりし時、翁、人々に告げて、「他の品は皆燒きても苦しからず。唯書籍だけは一册も多く出し給はれ。」とて、自身も年來の鈔錄本を風呂敷包にし、これを負ひて、太秦(三)なるしるべの家に避けぬ。この火にて內裏の炎上せし由を聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、內裏の燒跡を拜し奉りて、

(一)光格天皇の御代。火災は天明八年（一七八八年）。
(二)京都の歌人。享和元年（一八〇一年）歿、年七十九。鈔錄本
(三)今京都市右京區。

けさ見れば燒野の原となりにけり
これやきのふの玉敷の庭

——新說歌がたり——

二二　鉢の雜草

相馬御風

冬籠のわびしさの慰めの一つとして、私は毎年幾鉢かの盆栽を室內に取入れて置く事を忘れなかつた。この冬にも、私は冬籠の第一のしたくとして、それをした。

そこで今私の部屋には、二鉢の白梅と、一鉢の緣白山蘭と、一鉢の櫻草と、そして一鉢の木瓜とが、それ〴〵の自然の姿と、色と、香とを添へてくれてゐる。花を咲かせてゐるのは、唯

二鉢の梅だけであるが、木瓜も昨日今日やつと二つだけ遠からず咲きさうな蕾の色を見せて來た。この木瓜は、東京に住んでゐる或友人から、去年の春、花の咲いたまゝのを贈られたので、今年もそれに負けない程の花が見たいものと丹精してゐる。だが、總じてこれ等の盆栽は、花がなくとも、幹や枝がもつそれ〴〵の姿、葉がもつ綠の色だけでも、私には眺める度毎に新たな味はひを惠んでくれてゐるのである。草木の美に眺め入る靜かな歡は有難い。

所で、ついこの間の事であるが、私はこの數鉢の盆栽を、特にどれといふ事なしに、ぼんやり眺め廻してゐるうちに、ふと、どの鉢にもいろんな雜草の群生してゐる事に氣附いた。

（毛）

どの鉢にもそれの主としての木か草かがある。私に取つては、それだけが眼目であつた。然るによく見ると、どの鉢にも、全く心に留めてゐなかつた種々な雜草が、何時の間にか勢よく伸び廣がつてゐる。中には小さな薄紫の花を咲かせてゐるのもある。またさゝやかな穗の樣な花を伸してゐるのもある。蔓の樣な莖をもつた物、粟粒程の蕾らしい物を澤山つけてゐる物。……それは〴〵、見るにつれて、容易に數へ切れぬ程樣々な種類の雜草が、いかにも春らしい氣分を狹い地面に漂はせてゐるのであつた。しかも、その何れも私が心して養つて來たのではないばかりか、それをむしり殘して置いた事すら、全く私の心の關しない事であつた。

それであるにも拘らず、今かうして私の心が一旦それ等の存在と結び附くと、私が主として來たそれ〴〵の鉢の「あるじ」である木や草以上にすらも、それ等の雜草は私に豐かな味はひと、大きな歡とを與へてくれる。そして私は、私の家族たちにも、また訪ねて來る多くの人々にも、その歡を分たうとまでしつゝある。しかも妙な事には、誰一人それを眺めて樂しまない者はない。

所が更に妙な事には、私ばかりでなく、誰も彼もそれ等の雜草の名を知つてゐる者がない。

「どこにでもある草ですがね。」

誰も彼もさう言ふ。

しかも、誰も彼もその名を知らない。名などは知らなくてもいゝとしても、せめてそれ等の雜草のもつ特性くらゐは、これまでに心を留めて置いてもよかつたらうにと思はれるが、私始めそれすら氣に留めた事がなかつた。

「どうもいゝ蘭ですな。」

「梅がよく咲きましたね。」

あれは木瓜ですか。どうもいゝ枝ぶりをしてゐますね。」

「櫻草がよく伸びましたなあ。花がなくても、あの葉の色だけで十分樂しめますね。」

誰も彼も先づそんな風である。中には

「あの木瓜の鉢はいゝ鉢ですね。」

と言つた樣な調子に、鉢に先づ目を留める人さへある。

が、そんな風でありながらも、私が特に注意を雜草に向けさす樣な事を言ふと、誰も彼もがそれをたまらなく面白がる。そして、これまで目を留めた事すらなかつた名も知らぬ雜草の美しさを、今更の樣に、口を極めて讃歎するのである。そして中には、最後にこんな事を言ふ人さへある、

「それにしても、かうして植木鉢の中の雜草をわざ〳〵むしらずにお置きになるあなたも、隨分變り者ですな。」

それに對して私は答へる、

「いや、どう致しまして。私にはそんな貴い心持はまだ出來てゐませんよ。これは私がむしらずに殘して置いたので

はなくて、寧ろ私の不精の結果です。草は草で勝手に生えたんで、私自身もやつとこの頃それを見附けたんです。しかも、何年となく同じ樣にして來てゐながら、かうした草のある事に氣が附いたのすら、今年始めてなんです。あなたもおうちへお歸りになつて、あなたの所の植木鉢を御覽なさつたら、多少の差はあつても、同じ樣に草が生えてゐるかも知れませんよ。」

中にはまた、

「こんなに面白い物とすると、來年から冬籠の間の樂しみに、かうした雜草を澤山大きな鉢にでも移植して置かうか。」

などと、何か大發見でもした樣に言つて行く者さへある。

しかし、誰一人さうした雜草に、またそれ等の美に心を留めなかつた自分を恥ぢる者はない。また自分たちが少しも手をかけず、また心も向けないかうした雜草にすらも、限りなき味はひと歡とを與へてくれる自然の恩惠に就いて語る者もない。私にはそれが何だか寂しい樣な氣もするのである。

「雜草でもこんなに面白味のあるものだとすると、來年の冬からは、一つ雜草の鉢植をやつてみよう。」などに至つては、私は寧ろ人間のづう〳〵しさを悲しまずにゐられない樣な氣にさへなる。そんな風な考をもつ人に限つて、春にでも

踏みしだく

なると、踏まなくてもいゝ草原まで踏みしだいたり、むしらなくてもいゝ草まで氣にしてむしつたりするのだらうといふ風にさへ、考へられるのである。

かうして、時には樣々な感想を抱きながらも、私はそれ等の雜草に眺め入る多くの場合に於て、何時となしに無心の歡を惠まれつゝある。そしてそれを今年の冬籠の最も嬉しい事の一つとしてゐる。

二三　春は來ぬ

(一)島崎藤村

春は來ぬ。春は來ぬ。
初音やさしき鶯よ、

(一)詩人、小説家。名は春樹。明治五年長野縣に生れた。新生、飯倉だより、春、嵐、藤村詩集等の外、數多の小説、感想、童話の著がある。

去歳に別れを告げよかし。
谷間に残る白雪よ、
はうむりかくせ去歳の冬。

春は來ぬ春は來ぬ。
寂しく寒く言葉なく、
貧しく暗くひかりなく、
みにくく重く力なく
悲しき冬よゆきねかし。

春は來ぬ春は來ぬ。
淺みどりなる新草よ、
遠き野面を描けかし。

咲きては紅き春花よ、
樹々の梢を染めよかし。

春は來ぬ春は來ぬ。
霞よ、雲よ、ゆるぎ出で、
凍れる空を暖めよ。
花の香送る春風よ、
眠れる山を吹きさませ。

春は來ぬ春は來ぬ。
春をよせくる朝潮よ、
葦の枯葉を洗ひ去れ。
霞に醉へる雛鶴よ、

若き朝の空に飛べ。

春は來ぬ。春は來ぬ。
憂の芹の根を絶えて、
凍れる涙いまいづこ。
積れる雪の消失せて、
けふの若菜と萌えよかし。

——藤村詩集——

二四　士魂商才

澁澤榮一[一]

昔、菅原道眞[二]は和魂漢才といふ事を言つたが、これは面白い事と思ふ。これに對して、私は常に士魂商才といふ事を唱道するのである。和魂漢才とは、日本人は日本特有の日本魂

(一)實業家。子爵。埼玉縣の人。昭和六年歿、年九十二。青淵百話、世に出る青年、世渡の修養等の著がある。
(二)平安朝時代の學者、政治家。藤原時平の讒によつて太宰府に流された。此所に歿した。時に延喜三年(一五六三年)、年五十九。

一日の長

(一)四書の一。二十篇。
(二)書經と同じ。孔子が支那上古帝王の遺書を刪修して序列したもの。
(三)毛詩ともいふ。孔子が古詩三千餘篇の中から三百餘篇を撰したもの。風、雅、頌に別してゐる。
(四)支那周代の制度を記した書物。周公旦の作といはれる。
(五)支那周代の士、大夫、諸侯等の禮節に關するものを集めたもの。周公旦の作といはれる。
(六)舜の讓を承けて帝位に卽き、國を夏と號した。
(七)夏の桀王を亡して國を建て、

を根柢としなければならぬが、しかし、支那は古いし、文化も夙く開けて、孔子や孟子の樣な聖人賢者を出してゐるくらゐであるから、政治方面、文學方面その他に於て日本より一日の長がある。それ故、漢土の文物、學問を修得して、才藝を養はなければならぬといふ意味である。漢土の文物、學問は澤山な書物に載せられてあるが、その中心となるものは、孔子の言行を記した論語[一]である。尙書[二]、詩經[三]、周禮[四]、儀禮[五]などの樣に、禹[六]、湯[七]、文[八]、武[九]、周公[一〇]の事歷を書いた書物もあるが、それとてやはり孔子の編纂したものと傳へられてゐるから、漢學と言へば、必ず孔子を中心とするのであ

一　澁澤榮

國を殷と號した。
(八)武王の父。
(九)殷の紂王を亡して國を周と號した。
(一〇)名は旦。文王の子、武王の弟。
(一)第十五代。
(二)三韓の一。今の忠清、全羅兩道の地。
(三)百濟の博士。我が國に歸化した。
(四)一卷。梁の周興嗣の撰、四言古詩二百五十句から成る。

る。その孔子の言行を書いた論語であるから、菅公も大層愛誦して、應神天皇の朝に百濟の王仁が獻上した論語や、千字文の朝廷に傳へられてゐるのを筆寫して、伊勢の大廟に獻じた。世に菅本論語といつて現存してゐるのは卽ちこれである。

士魂商才といふのも右と同樣の意義で、人間が世の中に立つには、武士的精神の必要な事は無論であるが、しかし、武士的精神だけがあつても、商才がなければ、經濟の上から自滅を招く樣になる。それ故、士魂に商才を併せ有してゐなければならぬ。さて、士魂を養ふのには、多くの書物のうちで論語が最も有效である。そして、商才も論語によつて十分これ

詐瞞
輕佻

熟讀翫味
金科玉條
座右

を養ふ事が出來る。道德的の書物と商才とは何等の關係もない樣に思はれるけれども、元來商才も道德を根柢とするものである。道德を離れた不道德、卽ち詐瞞、浮華、輕佻の商才はいはゆる小才、小利口であつて、決して眞の商才ではない。既に商才は道德と離れる事の出來ないものである以上、商才もまた道德の書たる論語によつて養ふ事が出來るわけである。人が世に處して行くのは至難であるけれども、論語を熟讀翫味すれば、大いに悟る所がある。それ故、私は平生孔子の敎を尊信すると同時に、論語を處世の金科玉條として、常に座右から離した事がない。

(一)政治家、批評家。明治十八年群馬縣に生れた。南洋遊記、思想、山水、人物、英雄待望論、小説母、子等の著がある。

(二)gentleman.

躊躇

二五　紳士の國、子供の國

鶴見祐輔(一)

イギリスはゼントルマン(二)の國であると言はれてをる。ゼントルマンといふ言葉は、英語にだけあつて他國語にはないと言はれる程、イギリスの文明を代表する言葉になつてをる。世界の四分の一を領地とする程の繁榮も、天下に霸を稱へて四百年の間なほ世界に雄飛してゐる所以も、富んで驕らず、足つて溺れる事のないその紳士道のお蔭であると言はれてをる。

「教育の目的は。」と聞かれると、イギリス人は躊躇なしに、「それはゼントルマンを作る事だ。」と答へるといふ話である。

或イギリスの片田舎で、池に浮べた小舟の上に二人の子供の姿が見えた。一人は九歳くらゐの男子で、一人はそれより一つ二つ年上の女子であつた。そのいたづら盛りの男の子が、足を廣げて舟をゆすり始めた。はた〳〵と小波が舷を打つまで小舟はゆれた。女の子は恐しがつて、頻りに「止めて頂戴。」と叫んだが、男の子は興に乘じて、益舟をゆり動かした。すると、女の子は腹を立てて叫んだ、

「フランク、そんな事をして、あなたゼントルマンではありませんよ。」

忽ち男の子は耳の附根まで眞赤になつて、すぐにいたづらを止めてしまつた。「お前はゼントルマンではない。」その一

言が、何の説明もなしに人の胸を打つ所に、イギリスの向ふ所があるのである。

紳士道の中心は名譽を尊ぶ心である。財産や地位は捨てても唯一つの名譽は守るといふのが、紳士道の根本である。ゼントルマンの體面を汚して立身出世するくらゐなら、餓死してもゼントルマンの名譽は守らねばならぬ。必ずしも勝つのが目的ではない。男らしく正々堂々と戰つて、飽くまで名譽を守らうとする心掛に、イギリスの紳士道は生きてゐる。

であるから、西部戰線にドイツの軍隊が阿修羅の樣に狂ひ廻つた時、イギリスの青年たちは、すぐにゴルフ棒を投出

阿修羅

(一)golf.

してフランスの戰場に駈けつけ、その若い魂をフランダースの野に抛つても、少しも悔いなかつたのである。かくして紳士道は飽くまでイギリスを守る大黑柱であつた。

イギリスに駐在したアメリカ大使のページといふ人が戰地を視察した經驗談の中に、次の樣なのがあつた、

「イギリスの軍隊も、ヨーロッパ大陸諸國の軍隊も、戰場で勇敢な事は少しも變りはないが、大陸の兵士は、若し負傷が重くて、『とても一命は助からない。』と言はれると、きつと泣く。しかし、イギリスの兵士は唯默つて死んで行く。」と。

イギリス人の魂のうちで、世界の何人もが感心してゐるのは、自分の正しいと思ふ事は何が來ても恐れないたとひ

大黑柱

(一)Flanders. フランスの北西部やらベルギーの南部に跨がる地方。

(二)Walter Hiners Page. (西紀一八五五—一九一八年)

(一)Waterloo. ベルギーの首都ブルッセル附近。西紀一八一五年六月十八日此所で英將ウエリントンがナポレオンの軍を破つた。

(二)Arther Welle ley Wellington. (西紀一七六九—一八五二年)

拒絶

(三)sport.

王侯貴人と雖も膝を屈しないといふ、その強烈な正義感である。ワーテルローの戰で稀世の英雄ナポレオンを大敗せしめたイギリスの名將ウエリントンが、狩に行く途中或牧場を無理に通過しようとした時、

「ウエリントン公爵ともいはれる偉い御方が、父の命に背けと言はれようとは思へません。」

と言つて、きつぱり拒絶した少年の意氣を想へ。

イギリス人はまたスポーツを愛する。彼等がスポーツを好むのは、唯健康の爲ばかりではない、競技の間に於ける感激を愛するからである。彼等は善く戰ひ、正しく戰ふ。それを

(一)fair play.

立憲政治

彼等はフェア・プレーと言つてをる。フェア・プレーとは、「公明正大の戰」と言つてよからう。勝つ事だけを目的とせず、立派に勝つ事、立派に負ける事である。それがイギリス人の競技の精神である。

イギリス人は、このフェア・プレーの精神をスポーツだけではなく、あらゆる方面に活躍させてをる。イギリスの政治が、何時でも明るく壯快な趣があつて、世界の立憲政治の花と仰がれてをるのも、この精神あるが爲である。

スポーツを愛するイギリスは、また若い者の國である。競技を愛する者は老い難いからである。二挺の櫂を操つて、テムズ河の上流に夕雲を眺めるのもよく、年末に手カバン一

つ提げてアルプスに氷すべりに行くのもよからう。一卷の詩集を携へて野越え山越え旅行するのもまたよからう。

七十、八十になつても、子供の樣に嬉々として老を忘れてゐる元氣な老人の國イギリスは、同時にまた子供の王國であると言つてもよいくらゐ、子供の大切にされる國である。

子供を大切にすると言つても、妄りに甘やかし愛する事ではない。「子供の將來の爲に財産を遺して置いてやらう。」といふ樣な愛し方ではなく、「子供が成人の後いかなる苦勞があつても、それにうち勝つ事が出來る立派な人間になる樣に。」といふ愛し方である。

イギリスの紳士道は、かうして少年時代から注意深く養

はれるのである。かうして彼等は、立派な、名譽を重んずる、男らしい、強い、正しい人間にしこまれてゐるのである。イギリスが永い間世界に雄飛した所以、實にこゝにありと言ふ事が出來る。

——日本と世界——

國風 國のならはし。國家の風習。

自修文

我が國の家庭

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて路端に遊んでゐるのは、我が國ではどこへ行つても見受けられる事であるが、西洋では決して見られないそれを始めて見た或外國人が、

「何といふかはいらしい樣子であらう。此所に日本の美しい國風が見える。」

と言つて感心したさうである。素直に親の言附を守るのは、日本

美德　うつくしい道德。

一端　かたはし。

東西　東洋と西洋、卽ち世界中の意。

風習　ならはし。ならひ。しきたり。

七夜　子が生れてから七日目。

の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹をかはいがつて世話をするのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切にするのも、日本の家庭の特色である。この西洋人は、くはしくは我が國の家庭の內部を知らなかつたのであらうが、路端の子供を見て、我が家庭の美德「父母ニ孝」「兄弟ニ友」の一端を認め得たのである。

父母の子を愛する情は東西共に變りはないが、日本の家庭では殊に子供を大切にする。家の貧富貴賤によつて、生活の上にはそれ〴〵の差別があつても、一體の風習は子供を大切にする。子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生れた時の父母の心は、家の後嗣が出來たのを喜び、家の益繁昌して行くのを祝ふのである。親族も朋友も皆同じ心で祝賀するのである。七夜までのうちに名を附ける。行末は立派な人になつて、御國の爲にもなれ。」と祖先の名に因んだり、めでたい語などを選んだりして命名する。三十二三日目には、產土神にお宮參をして、誕生した事をお知らせする。三つ、五つ、七つとだん〴〵成長すれば、七五三の祝と言つて、その年々の十一月にお宮に參詣する風習もある。男の子の袴著の祝、女の子の帶の祝、父母はひたすらその子の成長を樂しむのである。

三月三日の雛祭は女の子の節供、五月五日の端午は男の子の節供、一家中の歡喜は子供等の爲に傾けられる。美しい雛人形、勇ましい鯉のぼり、かういふ樂しい日は年々に繰返されるのである。盆やお歲暮の贈物にも、父母は子供等を喜ばせようと苦心し、親類知友からも、お子樣へと心を籠めた品物を贈る。我が國の都市程おもちや屋の多い所はないといふのも、小さい國民をかはいがる國風の盛んな事を證明するのである。

因む　よる。かたどる。

產土神　鄉土の神。

七五三の祝　男子の三歲と女子の三歲と五歲と七歲との年の十一月十五日に行ふ祝。

袴著　男子が五歲または七歲の時袴を著ける時の儀式。

帶の祝　女子が三歲、五歲または七歲の時始めて帶を著ける時の儀式。

傾ける　十分によろこびをつくす。

端午　五節供の一。陰曆五月五日男兒の立身出世を祝つて幟または冑などを飾る。

知友　ともだち。

老を慰める　自分の年よつたのも忘れてよろこぶ。

系圖　祖先からのつづきを書いたもの。

別家　或家族から分れて獨立した家庭。分家ともいふ。

(一)人の子たる者は父母を我が家の神とも我が身の神とも仰ぎ、一心にせよとの意。切にすること。

(二)江戸時代の國學者。鈴の屋と號した。伊勢松阪の人。享保元年(一七一六年)歿、年七十二。

大人　學德の高い人をたつとんでいふ稱。

あがめる　たつとぶ。

我が國の家庭には、お父さんも、お母さんも、お祖父さんも、お祖母さんもいらつしやる。日本の子供は父母の慈愛の外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は孫をいつくしんで老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌を祀つてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んで居つて、だんだんと子孫に傳はつて行くのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さういふ物のない所もあるが、本家にさかのぼり、源を正せば、皆それがある。家には家の紋もある。

ちゝはゝはわが家の神わが神と心つくしていつけ人の子

と本居宣長大人は歌はれた。父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神とあがめるのが、我が國古來の道である。親の親の

對等　上下なく同等であること。

先祖と同居　家の内には神棚なり佛壇なりがあるのでいふ。

世から傳へて來た道である。親しい懷かしい親愛の情に、貴い有難い敬愛の情が湧いて、父母に對しては神に對する樣なつゝましやかな心持になるのである。それ故、言語動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では親子、夫婦、兄弟、姉妹の間の言葉遣はすべて對等であるが、「家の神」と仕へ奉る父母に對しての言語は、もとより別でなければならぬ。先祖と同居してゐる我が國の家庭では、目上に對する言語と、目下に對する言語とに明らかな差別がある。親代りに世話をし、いたはつて下さる兄姉に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄姉は飽くまで幼少な弟妹を憐み、弟妹はどこまでも兄姉を目上の人とあがめ、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、茲に美しい家庭が成立つのである。「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和ス」る家庭が存立するのである。

西洋人は「日本は子供の樂園である。」と言つてゐる。「日本は子供

をかはいがる國である。」と西洋の讀本にも書いてある。我等がこの國に生れたのは、我等の幸である。

二六　五十鈴の流

河野省三[一]

昔西行法師は伊勢神宮に詣で、坐ろに深い敬虔の念に打たれて、

何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

と詠じた。神路山[二]の翠濃やかに、五十鈴川[三]の流清らかな神境に歩を運び、清々しく神々しい御神殿を千木高く彼方に仰いで、徐に額づき奉る時、誰しも尊さと、畏さと、懷かしさとの

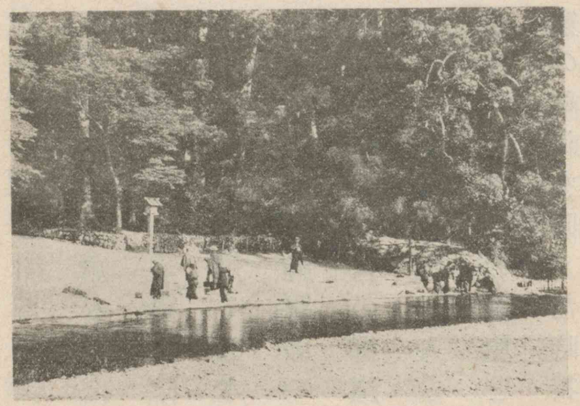
(一)倫理學者、文學博士、國學院大學教授、埼玉縣に生れた。明治十五年國民道德史論、神道の研究等の著がある。

(二)三重縣（伊勢國度會郡）。宇治内宮を繞る鬱蒼たる山林である。

(三)神路山及び島路山に發し、神域内を通り二見に至つて伊勢海に注ぐ。長さ約一六キロメートル。

氣持が胸に溢れて來るのである。其所は我が皇祖天照大御神を齋き奉る所、遠い昔から皇室と國民と一體となつて崇め奉る所、天壤と共に窮りない我が寶祚と國運とが、御裳濯川の流遠く、我等日本民族の心の底を流れ行く信念の舍る所である。文久元年橘曙覽は此所に參拜して

おはしますかたじけなさを何事も
知りてはいとゞ涙こぼるゝ



五十鈴川

(一)第百二十一代孝明天皇の御代。（二五二一年）

滿腔の感激

(一)鎌倉時代の歌人。第八十二代後鳥羽天皇の皇女禮子内親王に仕へた。

といふ一首に、その滿腔の感激を表してゐる。げに神宮の歴史を知る事は、卽ち我が皇室の歴史を知る所以であり、我が皇室の歴史を知る事は、卽ち我が國史の精髓を明らかにする所以である。嘉陽門院越前の歌に

いすゞ川その水上をたづぬれば
神路のやまにかゝるしら雲

とある樣に、神宮の御鎭坐を究め、その由來を調べてみると、誠に悠久の感慨に入るのである。皇祖天照大御神が皇孫瓊瓊杵尊に皇位の御璽として三種神器を親授せられ、天壤無窮の神敕を賜うた時、特にその寶鏡に就いて優渥な御言葉を添へられた。爾來歴代の天皇はその御遺訓に基づいて、皇

優渥

(一)第十代。

(二)奈良縣磯城郡。

(三)崇神天皇の皇女。第一代の齋宮。

(四)第十一代。

(五)第二代の齋宮。日本武尊の御姨。今宇治山田市外倉田山上の倭姫宮に祀られる。

祖の大御心を體し、親しく同殿共床の御儀を以て神器を奉齋せられたのであるが、崇神天皇の御代に、神威の發揚と皇威の發展とに伴なひ、神璽は御傍に留め、寶鏡と靈劍とは、政務の繁劇な宮中から笠縫邑の靈域に遷して、嚴かな神殿を創建し奉つた。

皇祖の神靈を奉齋した神宮には、皇女豐鍬入姫命が恭しく奉仕せられ、更に適當な靈地を求めて丹波、大和、吉備の諸國を巡り、次いで垂仁天皇の皇女倭姫命が代つて齋宮となり、伊賀、近江、美濃の諸國を經て伊勢に出で、その二十六年九月、此所に畏くも五十鈴川の上に宮柱太く千木高く鎭坐し奉つた。これ卽ち皇大神宮であつて、宮中に模造して留め奉

つた神鏡も、內侍所卽ち賢所として、篤くこれを崇め奉つてゐる。

その後、靈劍は景行天皇(一)の御代に日本武尊の東夷征伐に際して、尾張國熱田に遷坐せられ、また雄略天皇(二)の二十二年九月になつて、豐受大神の神靈が丹波國から山田原に迎へられて、皇大神宮卽ち內宮近く奉祀せられた。これ卽ち外宮である。豐受大神は大御神の御饌都神であつて、蓋し大御神が國民の生活に軫念あらせられて、皇孫に齋庭の稻穗を賜はつた神敕に基づいて奉齋せられたのである。皇大神宮の御創立と御奉仕とに功績の多かつた倭姫命は天資聰明叡智で、後世に及した感化も深いから、大正十二年の冬に至つ

(一)第十二代。
(二)第二十一代。
軫念

て、內宮の別宮として奉祀せられる事となつた。

內宮鳥瞰圖

神宮は內宮、外宮、何れもいはゆる神明造の正殿の左右に相對して東西寶殿が立ち、瑞垣、蕃垣、內玉垣、外玉垣、板垣を以て圍まれ、一般には板垣南御門を入つて、外玉垣南御門の前で拜し奉るのである。天武天皇(一)の頃から、二十年毎に木の香新しく造營し奉る事となり、後村上天皇(二)朝以降、二十一年目毎になつた。御造營は力めて古來の建築樣式を守り、主として檜材を用ひて、御屋根は茅葺とし、彫刻色彩

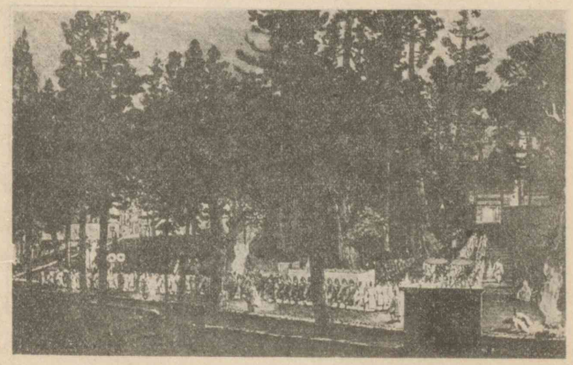
(一)第四十代。
(二)第九十七代。

を以て裝飾する事なく、專ら莊重と清淨とを旨としてゐる。

明治天皇が神社といふ題で、

いにしへの姿の
まゝにあらためぬ
神の社ぞ尊かりける

とお詠みあそばしたのは、蓋しこの事であらう。式年御造營に際しては、種々のゆかしい祭祀の後、莊嚴盛大な正遷宮が行はれる。昭和四年十月の第五十八回の遷宮祭には、全國各種團體の代表者もその盛儀に參列して、皇運の無窮と國運



式年遷宮式（五姓田芳柳筆）

の隆昌とを壽いだのである。

毎年十月十七日に行はれる國家の大祭日の一たる神嘗祭は、その秋の新穀を先づ皇祖の大御神に奉る神宮の御例祭である。齋宮として奉仕した齋內親王は、後醍醐天皇の朝(一)に至つて斷絶したが、明治の御代以來は特に神宮司廳を設け、親任の祭主を置かれ、尙大宮司、少宮司、禰宜以下多くの神官が奉仕する事となつた。年中の恆例、臨時の諸祭典は、卽ち上皇室より下國民に至るまで、心を一にして皇祖に奉仕し、以て寶祚の無窮、國運の發展を祈る所の道德と生活との反映であつて、明治天皇の御製に、

神風の伊勢の宮居のことをまづ

(一)第九十六代。

ことしもものの始にぞきく

とあそばしてをるのは、全くこの深い大御心に出てをるのである。國民が伊勢參宮を以て一生一度の懷かしい榮(はえ)ある義務と心掛けてをるのも、全くその國民性に出で、その信念に因るものであつて、上下相俟つて、我が國體の精華を成してゐるのである。されば億兆の國民が皇室を中心として我が皇國に奉仕してゐると同樣に、全國十餘萬の神社も、皆この神宮を中心として、我が神國を守護しつゝあるのである。我等日本人は五十鈴川の清流に口と手とを清め、心を洗つて、廣前に頭を垂れた時、おのづから昭憲皇太后の御歌のこころがしのばれるのである。

神風の伊勢のうちとの宮ばしら
ゆるぎなき世をなほ祈るかな

二七　日本の至寶

德富蘇峯(一)

(一)歴史家、評論家。貴族院議員。名は猪一郎。文久三年(一八六三年)肥後に生れた。國民叢書、靜思餘錄、蘇峯文選、吉田松陰、近世日本國民史等の著がある。

世の中に日本の歴史程立派な歴史はない。

古は我が日本國をば豐葦原の瑞穗國と言つてゐたが、アメリカ合衆國を見ても、支那を見ても、物質的には日本より多く惠まれた國である。日本はさ程石炭にも富んでゐない。日本には金山も少い、石油坑も少い。

しかしながら、日本には他國に決して比類のない美しい歴史がある。これは實に大和民族の至寶である。またこれが

大和民族の生命である。然るに、古來我が國民はこの歴史を餘りに粗末にしてゐるのではあるまいか。

外國の歴史に於ては、爭は概ね君主と人民との爭である。帝王と人民との爭である所が、日本の歴史には未だ曾てかかる爭はない。

成程戰爭はあつた。けれども、その戰爭は人民と人民との戰である。時としては皇室内に於ける爭もある。皇室の或御方と或御方との爭が元弘の亂である。人民と人民との爭が卽ち應仁の亂である。

異議を唱へる

かう言へば、或は異議を唱へる人があるかも知れない。承久の亂はどうかといふ人があるかも知れない。しかしながら、承久の亂は後鳥羽院が北條氏を誅伐せられたもので、北條氏は唯止むを得ず敵たうたので、北條氏の方からお上を攻めたのではない。さうしてまた、北條氏はお上に敵たうたけれども、北條氏にも帝位を奪はうなどといふ樣な考は髮の毛程もなかつた。

支那では王侯將相種あらんやで、いかなる場合でも、人民が君主に敵たふ時には、これに取つて代らうとしてゐる。黥布が漢の高祖に向つて謀叛した時に、高祖が何を苦しんで反するかと言はれたら、帝たらんと欲するのみと答へた。日本で逆賊の標本にされてゐる北條義時でも、その心事は帝たらんとしたのでなく、彼一族の安全を保たうとしたので

(一)第八十二代。
(二)北條義時とその一族。
(三)支那漢代の人。高祖を輔けて淮南王に封ぜられたが、韓信等の誅せらるるのを見て、禍の己に至らんを懼れて反した。
(四)名は劉邦。項羽と共に秦を滅し、後項羽を垓下に破り、天下を定めて帝位に卽いた。西紀前一九五年歿。

(一)前漢の平帝の世に榮爵と政權とを得、外戚なり、政を攝し、終に帝を弑して位に即いた。在位十四年で豪族に殺された。(西紀二三年)

(二)三國の魏の始祖。後漢の帝を擁して四方を征し、河北を定め、魏王となつた。(西紀二一五年)

(三)魏の武將。曹操及び子文帝に仕へて功があつた。廢帝芳の時丞相に殺されこれ代つた。(西紀二四九年)

(四)後漢の武將。獻帝を擁して權を專らにし、都を長安に遷して暴虐を行ひ、その臣に殺された。(西紀一七六)

あつた。日本の歴史に於て、臣民が朝廷に敵たうた唯一の例とされてゐるこの事でも、事實はさうである。

尙皇室に對して事を企てたものとされてゐる人物には弓削道鏡があり、相馬將門があるが、相馬將門は檢非違使にならうといふのが目的であつた。今の時代で言へば、警視總監になれなかつたから、自分の選擧區に歸つて、少し暴れたといふくらゐの事である。あれを以て直ちに漢の王莽[一]とか、魏の曹操[二]とか、司馬懿[三]とか、董卓[四]とか、朱溫[五]とか、若しくは近き袁世凱などに比するのは、寧ろ彼を買被つてゐるものである。

弓削道鏡に關しては色々の說があつて、或は彼は天智天

(五)五代梁の太祖。唐の昭帝を弑して唐の天下を簒つた。

(六)清代の政治家。清朝の滅びて民國となつて後、內閣を組織し、大總統となり、皇帝に推されたが成功しなかつた。(西紀一九一六年)

(一)京都市右京區。

皇の孫に當る。臣民になつてゐるけれども皇胤である。それであゝいふ事を考へたのだらうといふ說がある。思ふに弓削道鏡といふ人は、誇大妄想狂に過ぎない。かゝる人物の事を以て、日本歴史の全體を汚すものとするには足らない。

日本の歴史にはいかなる場合でも、臣民が皇室に對して弓を引くといふ事はない。足利尊氏は逆賊と言はれてゐるが、彼ですら未だ曾て一度も皇帝にならうといふ心を起してゐない。のみならず、非常に恐れ入つてゐた爲に、嵯峨[一]の天龍寺は出來てゐる。尊氏でさへも天皇に對つて弓を引くのは、その本心でなく、彼の心は常にその寵恩を思つて、その冥福を祈つてゐたのである。況や尊氏以外の者に於ては言を

(一)政治家。舊長門萩藩士。憲法制定その他に大功があり、大勲位公爵に上つた。明治四十二年歿、年六十九。

(二)政治家、軍人。舊萩藩士。維新の後に陸軍大將元帥公爵に列せられ、大正十一年歿、年八十五。

(三)政治家。舊鹿兒島藩士。維新の際參與、參議兼内務卿に任ぜられ、大久保利通の後を繼ぎ、明治十一年歿、年四十七。

須ひない。日本國民は歴史上勤王に徹底してゐる。

この國民的根本思想をよく看取してゐたのは、織田信長である。織田信長は日本に於ける近世的人物だ。信長時代からが吾人の時代である。信長は我等に取つては伊藤博文(一)の如く、山縣有朋(二)の如く、大久保利通(三)の如く見える。乃ち信長は近世的人物の先驅者だ。そして信長程、古今に亙つての能率家はない。信長の一身は能率の結晶だ。彼は苟くも能率の存する所、どこまでもやつて行つた人である。若し信長に、日本が皇室なしに行けるといふ見こみがあつたならば、どこまでやつたか知れない。

近世日本に於て、勤王家としては先づ信長を擧げねばならぬ。信長が何故にそれ程勤王に熱中したかと言へば、勤王でなければ天下を統一する事が出來ず、勤王でなければ日本を治める事は出來ない。日本は天皇の日本であるといふ根本原理を、徹底的に了解し、天皇を戴かねば、日本を治める事が出來ないといふ事を會得してゐたからである。

信長程の人間が、勤王でなければ日本は治らない例を示したから、秀吉も家康もこれを遵奉した。もとより德川幕府は勤王の程度が時々違つたけれども、勤王を廢止した事もなく、無視した事もない。私はこの點に就いて、實に日本の歴史は立派なものであると思つてゐる。

——言志小錄——

帝國實業讀本　卷二　終

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月三日發行
昭和八年七月十七日訂正再版印刷
昭和八年七月二十日訂正再版發行

帝國實業讀本
定價
自卷一至卷六　各金六拾錢
卷七・八　各金五拾四錢
卷九・十　各金五拾壹錢

版權所有

編者　芳賀矢一
訂補者　上田萬年
同　長谷川福平

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　冨山房
代表者　同所合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬
印刷所　東京市小石川區音羽町七丁目六番地　冨山房印刷部

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　冨山房
電話神田二、一七一―二、一七八番
振替口座東京五〇一番